

第18回
「私たちと北方領土」作文コンクール
入賞作文集



(北方領土返還祈念シンボル像「四島のかけ橋」)

北方領土返還要求運動富山県民会議
富山県「北方領土問題」教育者会議

目次

1	発刊にあたって……………	1	入選	黒部市立清明中学校	池村 麻里……	11
2	受賞作文……………	2	入選	黒部市立清明中学校	新村 吉平……	12
	富山県知事賞		入選	黒部市立清明中学校	水見 芽子……	13
	入善町立入善西中学校 金森 美咲……	2	入選	黒部市立清明中学校	堀 由梨奈……	15
	北方領土問題対策協会理事長賞		入選	黒部市立清明中学校	横山 響栄……	16
	黒部市立清明中学校 近川 藍子……	3	入選	黒部市立明峰中学校	吉島あかね……	17
	北方領土返還要求運動富山県民会議会長賞		入選	黒部市立明峰中学校	經 ゆい……	18
	高岡市立福岡中学校 松代航太郎……	4	入選	黒部市立明峰中学校	宮寺奏和子……	19
	富山県教育委員会教育長賞		入選	射水市立小杉南中学校	金山 怜……	20
	魚津市立東部中学校 島 詩月……	6	入選	射水市立小杉南中学校	田村 優哉……	22
	富山県市長会会長賞		入選	射水市立大門中学校	林 真紗斗……	23
	射水市立小杉南中学校 杉本 俊希……	7	入選	射水市立北部中学校	廣瀬 遥斗……	24
	富山県「北方領土問題」教育者会議会長賞		3	入賞者一覧……………		26
	黒部市立明峰中学校 水野 一真……	8	4	作文コンクール(要項・応募状況・審査内容) ……		27
	入善町立入善中学校 米澤英里奈……	10		(巻末) 参考資料		

発刊にあたって

北方領土は、私たち富山県民にとって先人が開拓した大切な領土であり、本県に約四百人おいでになる元島民の方々にとってはかけがえのない故郷です。しかし、戦後七十九年が経過した今日においても、依然としてロシアによる不法占拠が続けられています。

「私たちと北方領土」作文コンクールは、中学生を対象に、北方領土という日本の領土でありながら、日本人が自由に往来できない地域があるという現実を正しく理解し、関心呼び起こすことを目的に実施したもので、今回で十八回目となります。

県内全域の中学生から多数の応募をいただきました。北方領土の歴史や富山県とのかかわり、国際情勢、返還運動の取り組みを自分で調べるなど、興味と関心をもって学習している生徒が多いことに驚きました。この作文集は、そのうち十九編の入賞作品を掲載しておりますが、いずれも大変優秀な作品であり、北方領土問題の歴史的背景をしつかりと捉えていました。その上で、自分が体験したことなどをもとに北方領土問題の解決方法を考え、具体的に論述しています。どの作文からも、北方領土問題を身近な問題と捉え、若い世代が関心をもつて問題の解決に取り組んでいかなければならないという意欲が感じられました。また、残念ながら、あと一歩で入選を逃された作品の中にも、きらりと光るすばらしい作品が数多くありました。

これらの多くの作品から、北方領土問題解決の希望を託すべき次世代の皆さんが育っていることがうかがわれ、喜びにたえません。また、こうした学習を通し、生徒が国際的な場でも活躍できる力を身に付けてくれるものと期待しております。

私ども県民会議と教育者会議においては、これまで県内の全中学校に教育用DVDを、また、県内の全小学校に小学生向け学習資料のCDを配付するとともに、元島民の証言を収録したDVDを冊子化した「四島は私たちのふるさと」を県内の全小中学校に配付してきたほか、令和二年九月には、元島民や関係団体の皆様の念願であった「富山県北方領土史料室」を黒部市に整備し、昨年来場者数二万人を達成しました。この施設が返還要求運動の拠点となり、県内外の幅広い世代の皆様にご利用されることを願うとともに、引き続き、北方領土教育の一層の充実に努めていきたいと考えております。

おわりに、この作文コンクールにご協力いただきました多くの皆様方に改めて厚くお礼申しあげ、発刊の言葉いたします。

令和七年三月

北方領土返還要求運動富山県民会議

会長 山本 徹

富山県「北方領土問題」教育者会議

会長 松田 勝仁

返還への第一歩

入善町立入善西中学校 二年 金森 美咲

私が初めて北方領土問題を知ったのは、小学生の時でした。社会科の授業で「この問題はいち早く解決しないといけないんだよ」と先生から言われました。その時、私は「自分たちには関係ないのに何でこんなにも言われるんだろう。還つたら何になるのだろう。」と疑問に思いました。この思いから、北方領土青少年等現地視察事業に参加することになりました。北方領土青少年等現地視察事業では、十八名の中学生が北方領土問題について学びました。その中で、たくさんの方見をされるとともに、北方領土問題に取り組む新たな決意を抱きました。

二日目に訪れた納沙布岬では、わずか三・七キロメートル先に位置する貝殻島や水晶島等が肉眼で確認できました。島の近くでは、ロシアの船が「自分たちの島だ」と、言わんばかりに監視していました。日本の監視船もロシアの船を睨むように航行していました。

「なぜこんなことになってしまったのだろうか」と、心が痛みました。また、こんなに近いのに海の中にある境界線のせいで私たちは島に行くことができません。まさに『近くて遠い島』だと、島を眺めながら私は思いました。また、敷地内にある北方館・望郷の家では、元島民の暮ら

しやこの領土問題の経緯を当時の写真や展示物等から知ることができました。やはり、経緯を見ても一方的なソ連軍の攻撃によって、元島民が辛い思いをしていたことがよく分かりました。

北方四島交流センターでは、映画「ジョバンニの島」のモデルとなった語り部の得能宏さんのお話を聴きました。やはり、元島民である得能さんのお話は、私が想像していた以上に重いものでした。ソ連軍が侵入してきたときの話をする得能さんの表情はとても辛そうでしたが、島での暮らしの様子を話すときは思い出に浸るような笑顔で話されており、得能さんの北方領土への思いがよく伝わってきました。そこで、私は「もし四島が還ってきたらどうしたいですか」と、得能さんに質問してみました。すると、得能さんは、「もし還ってきたら色丹島の島ガイドをしたいですね。色丹島の自然はとってもきれいでね。皆さんにもぜひ見てもらいたいです。」と、誇らしげに答えてくれました。その時、私は確信しました。「この問題は元島民だけの問題ではない!」と。そして、このような四島への思いと早期返還を願う人たちのためにも、私たちが返還への一歩を踏み出さなければいけないと思いました。最後に得能さんは「国民一人一人がこの問題と向き合ってほしい」と言われ、私は心からいち早く解決しなければならぬ問題なのだ、と、改めて思いました。

最終日には、現地視察団の大野団長がビザなし交流のお話をしてくださいました。最初のうちは、「ここは日本の島だ。この領土は日本人のものだ」と言っていたロシア人

が、今では島を社会情勢の変化に合わせて現代的に開発しながら、「私たちの島だ」と言っているそうです。日本人が必死に開拓した土地を不法に奪い、今もなお占拠しているロシア人のことが私は許せません。現地視察事業の日程を重ねていく中で、私の北方領土への思いや領土問題に対する考え方が徐々に変わり、強くなっていきました。

「この問題は元島民だけの問題ではなく、私たちの問題だ。私にできることはまだ少ないけれど、たくさんの人に『北方領土問題とは何か』を伝えていきたい。」と。

私は今、返還運動に参加する機会があればぜひ参加したいと思っています。何より大切なのは、全国民が心を一つにしてこの問題を自分事と捉え、返還された後も絶対に忘れないことだと私は考えます。

北方領土問題対策協会理事長賞

「それ」が目指すもの

黒部市立清明中学校 三年 近川 藍子

北方領土。私たちの住む黒部市と関わりが深い。これまで学習する機会は多かったが、今まであまり興味はなかった。しかし、ロシアに占領された今でも、北方四島と日本との交流が行われていると知ったとき、私の考えは変わった。「北方領土は、これからどうなっていくのだろうか。」まず、「北方領土は日本固有の領土である」とよく聞く

が、その根拠は何なのだろうか。話は江戸時代までさかのぼる。当時、北海道に置かれていた松前藩が、北の方へ探検隊を出した。そのときに北方領土等の多くの島々が見つかり、後に北方領土を藩のものとした。このことは、資料に記されており、ロシアが初めて北方領土を探索するよりも前である。その後、鎖国が解かれ、ロシアと様々な条約を結んでいったが、北方領土は一度も日本から離れることはなかった。しかし、ソ連軍は第二次世界大戦時に日ソ中立条約を破って侵攻してきた。ソ連軍が北方領土まで来たときには、日本は既に降伏し、抵抗する者は誰一人としていなかったが、ソ連軍からの命令や恐怖感により、島民たちは着の身着のまま、根室や富山へ逃げるしかなかった。そして、現在の四島には、ロシアの人々が住んでいる。

日本は、今まで島では治せないような病気の治療や技術の提供等、相互理解のための人道支援を行ってきた。しかし、最近では島でも技術が発達し、日本の支援がいらないほどになっている。このままでは日本との交流が少なくなってしまうのではないだろうか。また、島には滑走路ができるなどの開発が進む反面、開発でできたゴミの山から自然発火したなどの事案が起きているとの話を聞いたことがある。世界有数の漁場でもあり、緑豊かな四島の美しい自然が失われてしまうのではないだろうか。本校を来訪した根室の高校生は、「豊かな自然、住んでいる動物たちを守るためにも間違った開発をしてほしくない」と、言っていた。このように、現在の日本と北方領土、ロシアとの関係等、これからのことについてはたくさん疑問がある。今

まで日露間で結ばれた様々な条約も、両国間の対談が継続されないと意味がない。今、私たちにできることは何だろうか。講演された方々は、「若い世代の関心度が下がっていく中、北方領土についての教育を受けることや知ってもらうことが大切」だと口々に話をされた。確かに私もそう思う。教育と言っても、ただ情報を受け取るだけ、概要を知るだけでは興味が湧かない。より詳しく知り、疑問が生まれるからこそ、初めて興味が湧く。そのために、返還要求運動を行う方々は、関心をもってもらうために、動画やラジオ、講演会等、様々な方法を使って、知識を伝え、様々な疑問を投げかける。ある方は、「今、情報を知ったこの瞬間から『情報発信者』だ」と言われた。北方領土返還を実現するためには、多くの声が必要である。しかし、元島民の高齢化により、当時の鮮明な状況を伝えることは困難となっている。だからこそ、私たち若い世代が正しい知識を得て、伝えていくことが必要なのである。

現在、ロシアの高校生が使用する教科書には、北方領土について明確には書かれてはいない。北方四島の交流では、日本人を歓迎する現在の島民の態度と緊張感が溢れるロシア兵の態度とでは、激しい差があると聞く。人々の心は通い合っているのに、なぜ国家レベルだと繋がり合えないのだろうか。元島民の方は、「もし北方領土が日本に返還されたら、いつでも誰でも行き来できるような島になってほしい。」と言われた。きつと、日本人もロシア人も関係ない、世界中の人々が行き来できる真の『平和の証』になってほしいという意味だろう。それを実現するために、

私たちは正しい知識を得て、その知識に想いを乗せて、人々に伝えていかなければならない。

北方領土返還要求運動富山県民会議会長賞

北方領土問題、まずは知ることから

高岡市立福岡中学校 二年 松代 航太郎

一九三九年に始まった第二次世界大戦は、日本においては一九四五年八月十五日正午、昭和天皇の玉音放送により、ポツダム宣言の受諾及び日本の降伏が、国民に発表されました。また、九月二日に降伏文書が調印され、正式に戦争の終わりを迎えました。しかし、日ソ中立条約を無視し、日本に侵攻していた当時のソビエト連邦は、日本の降伏後も侵攻を続け、八月二十八日から九月五日にかけて、千島列島だけではなく、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島を占拠しました。その後、現在までこの四島はソ連、今のロシアによる不法占拠が続いています。

さて、この終戦時の出来事を、一体どれほどの日本人が知っているのでしょうか。当然、社会科の授業で知る機会はあるでしょう。多くの人は何となく分かっているのが現状ではないでしょうか。では、この問題の本質まで分かっている人になると、どの程度いるのでしょうか。かくいう私もこの問題について詳しいわけではありませんでした。ましてやここ富山県から遠く離れた北方の島々のことを真剣

に考えたことなどありませんでした。そこで、まずは自分が知ることが必要だと考え、詳しく調べてみることにしました。

資料やインターネット等を見て調べ、まず驚いたのが、北方四島までの距離です。最も近い歯舞群島貝殻島から北海道の納沙布岬までおよそ三・七キロメートル。人間の歩く速度は時速四キロメートルと言われているので、歩いて一時間かからないことになります。また、四島の総面積は五〇〇三平方キロメートルで、富山県の約一・二倍です。さらに択捉島と国後島は、日本の離島でそれぞれ一番目と二番目に大きな島です。これほど本土から近く、そして広い、日本固有の領土が占拠されていること、これは許されざることです。

しかし、それよりも断然驚いたことがあります。それは、我が富山県は北方領土からの引揚者数が北海道に次いで多い都道府県だということです。富山と北方領土との関係は、当時まだ「越中」や「蝦夷地」と呼ばれていた江戸時代より、蝦夷地から北前船で大阪にコンブ等を運ぶ際に、越中が中継地とされていたことから始まります。明治になると富山から北海道に出稼ぎに行く人が増えていき、大正には歯舞群島、色丹島に移り住む人も出て、「越中村」と呼ばれる村ができるなど、密接なものでした。

私はこのことを知ったときに衝撃を受けました。今まで富山で生きてきて、こんな大切なことを初めて知ったからです。富山から離れた島なんて自分と無関係だと思っていましたが、こんなにも深く関わっていたのです。

私はここまで調べてきて、ある考えをもちました。私のように多くの人がこの問題を深く知らないということ。このことがよくないのです。知らないから関心がもてず、自分たちとの関連性が見いだせない。その結果、多くの人がこの問題に関わろうとせず、ここまで解決に至っていないのではないのでしょうか。元島民の平均年齢は八十八・五歳。かなり高齢化が進んでいます。そして、このまま時が流れると、そのうち故郷を奪われてしまった人はいなくなってしまうと思います。その結果、この歴史がなかったことになるということが、一番恐ろしいことです。それを防ぐためにも、特に私たち若い世代がまず知ることから始め、他ならぬ自分たちと関係のあることだと関心をもつことが返還の糸口になると思います。

現在、ロシアはウクライナへ軍事侵攻を続けており、日本はロシアの行為を強く非難し、返還交渉を行うにもかなり難しい状況です。しかし、元島民の悲願である四島返還に向けて、今こそ日本はロシアに主張すべき時。そして、私たち中学生もできることを探していくべきだと思います。そのために、まずは『知ること』が大切だと思います。

北方領土のために私ができること

魚津市立東部中学校 三年 島 詩月

私は中学一年生の夏、「北方領土青少年等現地視察事業」に参加した。自分の目で北方領土を眺め、元島民の方の話を聞き、資料館を訪れる中で、自分の考えが少しずつ深まっていた。元島民の方の話から、七十七年という長い時間とともに、当時を知る人もつ世代も少なくなってきたことを知った。元島民が心配そうに話す姿を見て、心が痛んだのを覚えている。

「北方領土について伝える人が、いつかなくなってしまうのではないか」

北方領土は、古くから日本人が苦勞を厭わず開拓してきた大切な『日本の領土』だ。富山県からも多くの人が出稼ぎに行き、北方領土のコンブ漁を支えた。四島には、そんな日本人の知恵と努力が詰まっているのだ。そして、元島民は皆、故郷が帰ってくることへの希望をもち、私たちが若い世代がいつか島を取り戻してくれることを何よりも願っていた。

「元島民にもう一度島を見せてあげたい。」

私はそう強く思った。

「想いをつなぐ役目」として視察で感じ取った自分の責務を忘れることなく、私は視察から帰った後も、たくさん

の人に北方領土のことについて話をした。しかし、視察から二年が経った今、状況は変わらないままだ。私が視察に行つて以降の二年間だけを考えてみても、長い時間かけて少しずつ進められてきた返還への兆しが、振り出しに戻るどころか、さらに悪化したように思える。平和条約締結まで発展してきた日本の交渉は、ロシアの一方的な停止表明によつて途切れてしまった。そして、現在、元島民の人数は終戦後の三割を下回り、平均年齢は八十八歳を超えている。この問題を元島民だけで解決するのは不可能だ。だからこそ私は、島民だけに解決を頼るのではなく、若い世代がもっと北方領土問題に関心をもつべきだと思う。私たちが若い世代には、今まで日本人が力を尽くしてきたこの問題を受け継ぎ、進めていく責任があるのだ。

そして、私はこの問題の解決に当たつて、若い世代の関心に加え、相手国への思いやりが必要だと考える。ロシアに占拠されてから八十年が経とうとしている今、北方領土にはたくさんの方のロシア人が暮らしている。日本が自分の領土を還してもらうことだけを考え、強引にロシア人を追い出せば、それは戦争の発端になるかもしれない。何より、島に何十年も住んでいる人の故郷を奪うことになる。故郷を奪われた元島民の思いを受け継ぐ日本人として、私たちは同じことを繰り返さないように、この問題をより平和的に解決していく必要がある。

そこで、私はこの考えに対して、自分ができることを具体的に三つ考えた。

一つ目は、他国の文化や考え方、言語等をもっと深く知

り、自分と違った視点に触れることだ。返還の交渉をするとき、お互いが納得する形で終えられるためには、相手国の意見や考え方を理解し、受け入れる姿勢が大事になる。また、日本と北方領土に住むロシア人との間では、かつて『ビザなし交流』という訪問事業が行われていた。今は、ロシアの停止命令によって中断されているが、交流が再開したときに、相手の言語を理解したり、自分の言葉で伝えたりできれば、よりよいコミュニケーションがとれると思う。二つ目は、思いやりをもつことだ。島が返還されたとしても、住んでいたロシア人の思いを忘れてはいけない。互いの故郷として協力しながら島を守っていくためにも、ロシア人への配慮は必要だ。普段から思いやりをもって生活し、思いやりの輪を広げていきたい。

三つ目は、北方領土の歴史や元島民の思いを、より多くの人に伝えることだ。視察に行き、元島民の話を聞くという貴重な経験ができたことに誇りを持ち、そんな自分だからこそ伝えられるものを周りに発信していきたい。

富山県市長会会長賞

北方領土問題を解決しよう！

射水市立小杉南中学校 二年 杉本 俊希

「どうすれば、北方領土の問題が解決するのだろう。」
そう思ったが、僕は正直なところ、北方領土について

あまり知らない。社会科の授業で、「日本の領土である北方領土は、ロシアに占拠されている。」と、少し習っただけで、教科書には一ページほどしか書かれていない。だから、あまり北方領土の問題を詳しく知らなかった。そこで、北方領土の問題についてのたくさん情報を得るために、富山県北方領土史料室に行ってみた。

北方領土史料室に行ってみると、僕予想をはるかに超える量の情報があつた。例えば、富山県が北方領土の元島民の数が北海道に次いで全国二位であることや、北方領土の暮らしなどだ。その中でも、北方領土の歴史について非常に興味をもった。

北方領土は、これまでの条約でソ連やロシアの領土として認められたことはなく、ずっと日本の領土だったそう。一九五一年のサンフランシスコ平和条約でも日本の領土として認められているのに、なぜ今はロシアに占拠されてしまっているのか。それは、第二次世界大戦が終結した後、ソ連が日ソ中立条約という日本とソ連が互いに侵攻しないという条約を破って、日本の領土である北方領土を武力によって占領したからである。そのため、北方領土には現在、日本人が誰一人として住んでいない。

このように、北方領土は日本固有の領土であるにも関わらず、ロシアに占拠されている。この大きな問題を解決するためには、どのようなことをする必要があるのか考えた。一つ目は、日露首脳会談の実施だ。まずは、領土問題のある両国間で話し合う場が必要だと思った。ロシアのウクライナ侵攻によって、日本とロシアの関係が悪化している

ときこそ、日本とロシアのそれぞれの国のリーダーが直接話し合うことで、北方領土の問題を平和的に解決することが理想であると思った。

二つ目は、日本とロシアの学生が交流し、北方領土の問題について考える場を設けることだ。日本の教育では日本の領土として習っているが、ロシアではどうだろうか。きつとロシアの領土として習っているのだろう。両国が領有権を主張し続けていることで、それぞれの北方領土に対する認識が異なるはずだ。交流を行うことで、双方の意見を共有し合って、意見をまとめることで、問題の解決に大きく貢献することができないかと思った。

しかし、この二つの活動は実現が少し難しいと思った。日露首脳会談は、国のリーダー同士が一对一で話し合うので、私たちにできることは少ない。また、学生の交流は、交流する人たちが同じ場所に集まって話し合いをする必要があるので、このような活動を学生が行うことは難しいことだと感じた。

そこで、国民一人一人が気軽に取り組めることがないか考えた。それは、日本とロシアのそれぞれの国民が北方領土の問題について詳しく知ることだ。両国の国民が領土問題に深く関わり、問題の論点を詳しく知ること、平和的に解決できるのではないか、領土返還に向けて貢献できるのではないか。国のリーダー同士で決めるということとは、二人の意見だけで決められてしまうようにも感じる。また、このまま両国が領有権を主張し続けるだけでは、この問題が解決するとは思えない。そのため、少しでも多くの情報

を国民が得ることで、平和的な解決につながらと思う。

「知ることが四島返還の第一歩」

この北方領土の問題を解決するのは簡単なことではない。そのためにも、一人一人が北方領土についてもっと知る機会をつくることで、問題の解決に向けて一歩ずつ進んでいくことができると思う。そして、いつかは北方領土を取り戻す日が来るだろう。

富山県「北方領土問題」教育者会議会長賞

ロシア人の「当たり前」

黒部市立明峰中学校 三年 水野 一真

北方四島をめぐる問題を初めて耳にしたときに考えたこと。それは、今この瞬間まで変化したことない、僕にとつての最終結論である。現在ロシアに暮らす約一億四六一五万人の人々。その大半の人には罪がない。ただそこにあるのは、彼らにとつての「当たり前」が僕たちと違うという事実のみである。

僕が初めて北方領土問題を知ったのは、今から八年前。まだ七歳の時であった。十二月十五日、当時の首相であった安倍晋三総理とロシア連邦第四代大統領ウラジーミル・プーチン氏の首脳会談について報じたニュースを見たことがきっかけである。北方領土問題の解決に向けての期待が込められた内容で、この時にはここまで深刻な問題だとは

知る由もなかった。自分にとって関わることの無い問題であると認識して過ごしてきた。

これが変化したのは、つい最近の出来事だった。僕の住んでいる富山県黒部市では、中学三年次の総合的な学習の時間に北方領土問題についての学習を行う。理由は、富山県が北海道に次いで、北方領土からの引き揚げ人数が多いからである。富山県は昔から昆布漁が盛んであり、漁場の一つとして北方領土近海へも多くの漁師が出向いていた。その漁師のほとんどが僕の住んでいる黒部市や隣の入善町に住んでいた人々である。僕の父は、入善町の漁師の家の出身だった。決して自分と関係のない問題ではないと、ようやく知ることができた。どこからか湧いてくる好奇心が、僕に様々な疑問を投げかける。駆り立てられるように、僕はその答えを探し続けた。それからの総合的な学習の時間は、衝撃的な出来事ばかりだった。元島民へのインタビュー映像の視聴や根室市の高校生との交流等の活動を通して、初めて知る北方領土問題の現状や心に刺さる人々の強い願い等を知ることができて、充実した時間になったと感じている。

映像やインターネットの記事等を、調べ学習で観ていると、たまに次の表現を見かける。「ロシア人のせいだ。彼らに奪われたんだ。」まるで全てのロシア人に罪があると決めつけているかのような表現だ。果たして本当にそうなのだろうか。確かに北方領土は今もロシア人に占拠されていて、多くのロシア人が暮らしている。北方領土に住む現在の島民を対象にしたアンケートによると、「北方領土を

日本に返還すべきか」という質問に対して、一〇〇パーセント近くの人が「返還すべきではない・返還するつもりはない」と回答したそうだ。これらの実態や調査結果だけを見ると、ロシア人ならば誰もが悪い人であるかのように感じてしまう。しかし、本当にそうであるという考えをもつロシア人を日本中のどこを探しても見つけることはできないだろう。なぜなら、ロシア人にとっての「当たり前」は、僕たち日本人には「非常識」になると誰もが知っているからだ。日本人には「ロシア人に奪われた日本の領土」である北方領土。一方、ロシア人には「昔からのロシア固有の領土」。双方の「当たり前」の違いである。その「当たり前」は、教育や指導に基づいて形成される。かつて日本では、戦争についての教育が行われた。当時の子供にとって戦争が起きていることが「当たり前」になった。つまり、日本と同様にロシアでも「北方領土は自国の領土だから渡さない。」という教育を受けたならば、北方領土の存在が「当たり前」になるのは必然である。

住んでいる国によって、言語や気候、人種、文化等は大きく異なり、多種多様である。人のもつ「当たり前」がこれらに影響され、異なるのは仕方がないだろう。ただ、この問題においては違うと思う。ロシア人の「当たり前」はロシア側だけで考えたもの。北方領土問題を互いの合意で平和的解決に導くには、双方にとっての「当たり前」が何かを理解し、話し合っていく必要性があると、僕は思う。

北方領土の返還を実現させるために

入善町立入善中学校 二年 米澤 英里奈

皆さんは「北方領土問題」という言葉を聞いたことがありますか。北方領土問題とは、日本人が誰よりも早く見つけ、日本人が一生懸命に開拓した四島を、ロシア軍が勝手に占領している状態のことを示します。

北方領土は、択捉島、色丹島、国後島、歯舞群島からなります。択捉島の面積はほぼ福岡県と等しく、意外と大きな島なのです。しかし、北方領土にいた多くの日本人の住居がなくなり、故郷に足を踏み入れることさえできなくなってしまうのです。

「故郷の北方領土を返してもらいたい。」元島民の方々の願いを叶えるため、二月と八月の北方領土返還運動全国強調月間を中心として、「北方領土返還要求運動」が行われるようになりました。第二次世界大戦終結（終戦）から間もない頃に、北方領土の返還を求める声が北海道根室市で上がりました。そして、その声は北海道から全国にまで広がり、今では日本中で運動が行われるようになりました。ここまで輪が広がっていったのは、元島民の諦めない心や国民の団結力があってこそのことだと思います。しかし、年々元島民の人数が減ってきていることに加え、平均年齢が高くなっています。これが現状なのです。このまま

ではいつか北方領土問題について声を上げる人々がいなくなってしまう、完全に北方領土はロシアのものになってしまうと思います。そうならないためには、今を生きる私たち若い世代がバトンを受け継ぎ、「もう一度、故郷の街並みを見たい」「地元の土を踏みたい」という元島民の方々の願いを叶えてあげるべきだと考えています。一秒でも早く取り返すことで救われる方が必ずいます。少しでも多くの人々にこの活動があることを広め、私たちが大人になる頃までには、北方領土が返ってきていることを願いたいのです。

時には相手側の視点で考えてみることも大切だと感じた私は、「ロシア人からは北方領土はどのように見えているのだろうか」と、考えてみました。北方領土は自然が豊かで、魚も大物が山ほど釣れる島です。そのため、この島を手放すと経済的損失が大きくなってしまいます。昔の日本人は、この島で魚介類を大量に調達して自給自足をする食生活を送っていたそうです。一方、ロシアは一年を通して気温が低く、海が凍ってしまう時期があるようです。そのため、ロシアが漁業の盛んな四島に住みたくなってしまう気持ちも分かるなど感じました。また、北方領土が占領されてから数十年経った現在、日本の街のように四島にはショッピングセンターやファストフード店、映画館等、様々なお店が建っています。そして、そこで平凡に生活しているロシア人もいたり、そこで生まれ育ち、自身にとって故郷となっているロシア人もいたりします。そんな人々のことも考えながら、返還運動を続けていくことで、ロシアとの関係を保ったまま返還を実現させることの近道となるはずです。

北方領土問題と私

黒部市立清明中学校 三年 池村 麻里

「北方領土問題を解決するには、若い世代が関心を持ち、理解する必要がある。」

この言葉が私の胸に刺さった。なぜなら、私も最初はこの問題についてあまり知らず、私が理解しなくても、いずれ誰かが解決してくれるだろうと思っていたからだ。

北方領土問題とは、日本固有の領土である歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四島が、戦後から現在までロシアによって不法に占拠されている問題のことだ。占領される前の北方領土は、とても自然が豊かで、世界三大漁場と呼ばれるほど水産資源が豊富だったそうだ。授業の後、同級生の親戚に元島民の方がいることを知り、全く身近ではないと思っていた問題が、ほんの少し近く感じられた。それでも、実際に起きたことだとはあまり信じることができず、自分事として捉えることができないままだった。

その認識が変わったのは、市内にある富山県北方領土史料室に実際に行ってからだ。これまで自分には関係ないことだと思っていたことが恥ずかしくなった。なぜなら、そこには元島民の実体験や写真、北方領土での生活で使用していた衣類や漁具等が展示してあったからだ。特に、元島民の実体験では、ソ連兵が勝手に家に上がり込み、家の中

を物色していったという話や、島から逃げて船で根室に向かう途中、ソ連兵に見つかって何発か発砲されたという話を書いてあった。「占領」という言葉だけでも、元島民の様々な辛い思いや経験、記憶がたくさん詰まっていることを知り、とても悲しい気持ちになった。同時に、今までおとぎ話のように捉えていたことを反省した。実際に元島民の実体験を聞いたり、遺留品を見たりして、島で平穏に生活していた人が突然生活を奪われたことを現実のものとして強く感じ、ニュースで目にするウクライナ侵攻と重なり、明日は我が身かもしれないと考えた。同じ悲劇を二度と繰り返さないためにも、北方領土問題は決して忘れてはいけない。必ず解決しなければならぬ問題だと身に染みて感じた。

現在、北方領土問題は七十九年が経過し、語り手の高齢化や減少が問題になっている。それに伴って、私たちのような若い世代の関心が薄れ、この問題が風化してしまう可能性が出てきている。「七十九年も経っているのに解決していないのだから、いまさら私たちが何かをしても変わらないのではないか」と思う人も少なくないと思う。しかし、「塵も積もれば山となる」という言葉があるように、一人一人が小さなことでも行動することによって、結果的に問題の解決につながるのではないかと考える。私たちができる小さな活動として、北方領土問題に興味・関心を持ち、正しく理解することが挙げられる。北方領土への興味や関心を持ち、正しい情報を正しく理解することで、風化の防止につながるからだ。そして、関心の低い人たちや身近

な友達、家族に広めることで、関心をもつ人が増えると思う。そうして、北方領土問題について認識する人が増えることで、結果的に解決につながるのではないかと考える。

近頃、ウクライナとロシアの戦争やビザなし交流の中止等、北方領土問題の解決から遠ざかりつつある。しかし、ここで諦めず、粘り強く興味と関心を持ち続け、元島民の想いを受け継いでいくことが大切だ。そこで、私は正しい情報を学び、一人でも多くの人に伝えていこうと思う。しかし、いきなり他人に伝えるのはとても難しいことだ。まずは友達や家族等の身近な人と、自分が史料室や出前講座で見聞きした話や感じた思いを伝え、話し合っていこうと思う。

北方領土問題が解決し、当たり前前に自分の国の領土が守られる世界になることを願っている。一つ一つは小さなことだが、多くの人が願い、行動することで、それが道になるだろう。私はそう信じている。

入 選

知るをあなどるな

黒部市立清明中学校 三年 新村 吉平

「日本最北端の択捉島は、国後島、色丹島、歯舞群島とともに北方領土と呼ばれる地域の一部で、北方領土は戦後から現在までロシアによって不法に占拠されています。」

小学校の頃から社会科の授業でこのようなことを何回も学びました。勝手に日本の領土を占拠するロシアに腹立たしさを感じながらも、私はどうすることもできないということが悔しかったです。国対国の問題、そもそも私たちが北方領土返還のためにできることはあるのか。スケールが大きすぎて、無力感すら感じていました。そして、このように感じている人は私だけではないようなのです。

二〇二三年の内閣府世論調査のアンケートによれば、北方領土問題の存在はほぼ全員に知られているのに対し、「北方領土の返還要求運動に参加することについてどう思うか」という項目においては、「あまり参加しようと思わない」「絶対に参加したくない」と答えた人の割合が六割をも占めるということを知りました。その理由としては、「自分が参加しても北方領土が返還されるとは思えないから」が最も多く、北方領土問題について、特に若い世代を中心に関心が低いということが分かりました。

果たして、このままでよいのでしょうか。また、返還に向けて私たちにできる有効な行動はどのようなものなのでしょうか。

「北海道と北方領土との距離は、富山県黒部市から能登半島を見るような感じだった。」この言葉は、北海道根室市に視察に行った同級生の感想です。私はこの言葉を聞いたとき、この問題は決して遠い島のものではなく、非常に身近なものであると感じました。

私は北方領土に関するビデオを見て、北方領土の開拓の歴史や、本土では見られない寒冷地ならではの自然等を知

りました。先人たちが開拓した北方領土は間違いなく日本の貴重な風景の一つであり、守るべき大切な風景だと感じました。では、そのような風景を取り戻すためにどうすればよいのか。その答えは、後日来校された方の言葉で分かりました。

私は、北方領土学習の出前講座で根室高校から来校された北方領土根室研究会（以下、北方研）の高校生の話を聞きました。北方領土の今や、ロシアが北方領土に対して行っていること等を学びました。最も衝撃的だったのは、島のあちこちでごみが放棄され、ごみの山ができていているということでした。北方研の生徒は、「ごみが増えることで、島固有の生き物の絶滅につながるかもしれない。」と話していました。

その後、北方研の生徒は、私たちにできることとして、「まずは問題を知る。」という最初の一步を提示されました。さらに、「北方領土の学習をしたあなたたちは、情報の拡散者です。身近な人に学んだことをどんどん伝え、この問題の理解者をどんどん増やしてください。」ということも言っていました。私は、理解する人が増えるだけで本当に問題が解決に向かうのかという疑問を抱きました。北方研の生徒は、「大事なのは問題を風化させないことです。返還が実現するその日が来るまで、粘り強く問題と向き合い続けましょう。」と話を締めくくられました。

北方領土問題は国レベルの問題です。今すぐ解決することとは難しいとしても、国レベルだからこそ返還要求運動を続けて、国民の意識がさらに高まり続けられれば、いつか返還

実現のチャンスをつかむことができるかもしれません。問題解決のために私たちにできることは、「まずは知る」ということです。

元島民の方の貴重なお話を聞いた私たちは、この問題の重要性を次世代にも強く訴えかけ、問題を風化させないということが必要だと感じました。私は、これからも北方領土返還のために意識を高くもち、解決に向けて自分にできることを考え続けていこうと思います。

入 選

次の世代に想いをつなぐために

黒部市立清明中学校 三年 氷見 芽子

私の学校では、毎年三年生になると北方領土学習を行います。校内には「北方領土資料室」があり、様々な資料や写真が展示されています。最終的な学習として、元島民を含む千島歯舞諸島居住者連盟富山支部の方々や、根室高校北方領土根室研究会の方々が本校に来校し、講演なされました。このように北方領土学習が充実している環境で、私はたくさんのお話を学びました。学習が始まる前、私は北方領土問題をどこか他人事のように感じていました。しかし、学習を進めていくうちに知識が増え、現状を知り、国際交流における重要な課題であることを強く認識しました。北方領土をめぐる問題の歴史は、一九四五年から約八十

年という長い月日が経過しており、今もなお続いています。そのため、元島民の方々の平均年齢は約八十八・五歳と高齢化の問題に直面しています。また、占領された北方四島の自然環境の面でも問題があります。現在、ロシアによる開拓が進んでおり、この現状について、千島連盟の方々は「島の美しい自然環境を残してほしい」と話されました。北方領土は動植物の宝庫と言われており、近海は世界の三大漁場に数えられる魚の宝庫として、豊富な種類の魚が生息しています。元島民からのお話によると、海には豊富な水産資源があるため、食生活には困らなかったそうです。根室市でも、花咲ガニやサンマ、昆布等を主とした水産業が盛んだそうですが、水域の制限により漁ができる範囲が限られているそうです。このような問題がある中、月日は過ぎていきます。

では、なぜ不法占拠されているのか。ロシア側は「北方領土は第二次世界大戦の結果による合法的な編入」だと主張し続けています。日本の返還要求運動が始まったのは一九四五年です。それ以降、何度も首脳同士が解決に向けて話し合っています。しかし、思うように進まない上に、今の両国の関係は決して良好とは言えません。一方で、北方領土のロシア人と日本人での交流は盛んに行われています。根室市の高校生は、活動を通して驚いたことの一つに「交流する以前はロシアに対する恐怖心があったが、全くそんなことはなく、四島に住むロシア人は優しかった。」ということを手挙げていました。元島民の方も「人と人との交流はお互いが理解し合えるが、国と国になるとうまくい

かない。」と言われました。私はその言葉を聞いてはっとしました。私自身、学習をしていく中で「ロシア」に対するマイナスイメージが多く、自国の利益だけにとらわれていました。北方領土問題の解決は、日ロ同士で理解し合うことが必要不可欠です。北方領土は元島民の大切な故郷であり、ロシア人にとっても大切な故郷なのです。そのため、自国の利益だけにとらわれず、両国が良好な関係を築くための解決策を考えなくてはならないと強く思いました。

一日も早い返還を元島民の方、数々の団体の方は願っています。しかし、現実的にはまだ時間がかかると感じます。その原因の一つは、若者の興味・関心の低下です。北方領土問題を他人事として捉えている人は多くいます。そのような若者が増えていく中、元島民の方々の言葉を思い出しました。「あなたたちは情報発信者です。知ることから始めて、みんなに伝えてください。そして、次の世代へ未来をつないでください。」私はこの言葉から、皆さんの思いを私たち若者に託されたような気持ちになりました。今回、私は北方領土学習を通して、現状や歴史を深く追究することができました。北方領土問題は決して他人事ではないし、領土返還が全てではありません。一人一人が考え、伝え合い、想いをつないでいくことが大切です。中学生の私にできることは限られますが、将来を担う一人として生活をしていきたいです。

美しい故郷をもう一度

黒部市立清明中学校 三年 堀 由梨奈

「北方領土」。この言葉を知ったのは、私が小学生のときだ。ワークやテストにもよく出題されるため、すぐに覚えられたことを覚えているくらい、私にとって印象に残った言葉である。しかし、私は、言葉を知っているだけで、北方領土については知らないことが多く、北方領土問題が存在すると知ってからも、自分たちの国の話であるというのに、「私には関係ない。」と、心のどこかで思っていた。

中学生になり、北方領土問題について学ぶ機会が多くなった。講演会に向けての北方領土学習も始まり、北方領土について初めて知ることになった。驚きがあった。中でも、北方領土を何の根拠もなしにソ連軍が占拠し、強制的に島民たちを追いついてきたことに驚いた。日本の領土である根拠として、「正保御国絵図」という一六四四年にかかれた地図に、北方領土の島が記されており、相手国の地図より前にかかっていることや、一度も相手国の領土になったことがないなどが挙げられる。一方で相手国は、当時結ばれていた条約を一方的に破り、不法占拠に至った。さらに衝撃的なのは、ロシアの人々は日本から土地を奪い返したという認識であるということだ。元島民の方々の残された時間が少ない中で、北方領土問題について正しい知

識をもった人がいなくなってしまうたら、この認識が本当のことになってしまう。すると、ふるさとと共に思い出は消え、元島民の方々のこれまでの活動が無駄になってしまう。そんな最悪の事態を許してはいけなないと、私は学習を通して強く思った。

根室の高校生二名と元島民の方々十名による講演会が、十一月一日に開かれた。高校生の話では、元島民の方々の高齢化が進む中、北方領土に近い根室市でも北方領土問題に対する関心が薄く、このままでは風化してしまうということが挙げられ、そうならないためにも「将来の仕事として活動が続けていきたい」と語る姿が印象に残った。根室市の全世代の人たちが「活動することによる効果がない」と諦めている中でも、「絶対に風化させない」という強い意志を曲げずに、元島民の方のために活動を続けていくことは簡単なことではない。私も根室の高校生のように、自分でできることを根気強く続けていきたいと思った。

元島民の方々の話では、北方領土の美しい思い出の景色は島の開発によりもう見ることができなくなる可能性があること、今すぐに北方領土が返ってきたとしても年齢的に故郷に戻ることができないことを知り、胸が痛んだ。また、「日本人もロシア人も同じ人間である」という言葉が印象に残っている。「一方的に相手を恨むのではなく、一人の人間として、お互いに歩み寄っていくことが大切だ」と、今までの自分になかった考えに、私は気付かされた。最後に、元島民の方々は、「北方領土問題に関心をもつこと、行われている活動に積極的に参加・協力すること、そ

れを発信することをお願いしたい」と、私たちに語られた。行動自体は、小さなことかもしれないが、これが今の私たちにできる最大限のことだと思った。講演会を通して、北方領土について情報を集めたつもりだったが、講演会で新たに知ることが多く、北方領土問題を正しく、詳しく知っている人は少ないのではないかと思った。そして、北方領土についていろいろなことを知ることができた私たちは、その正しい情報を発信すべきだと思った。

私は、「意味がない」と考え、あきらめて行動しないのではなく、「もっと意味がある活動にするためにはどうすればよいか」と考え、行動に移すことが大事だと思う。問題から目を背けることは簡単だが、よい方向には絶対に動かない。明るい大きな未来のためにも、日々の小さな一歩を恐れずに踏み出していきたい。

入 選

北方領土は日本の領土

黒部市立清明中学校 三年 横山 響栄

これまでほとんど北方領土問題に触れることがなく、自分には関係ないと思っていた。しかし、学校で北方領土青少年等現地視察事業の募集案内をもらい、「根室市に行けるチャンスかも」くらいの気持ちしかなかったが、応募したところ、参加できることになった。これを機に、青年会

議所で長く北方領土問題に関わってきた父や祖父に、改めて話を聞いてみた。

二人の話を聞いて、まず、国民一人一人が問題意識をもてていないことが問題だと考えた。富山県は、北方領土からの引揚者が全国で二番目に多く、富山県の中でも特に黒部市が多い。そのため、北方領土問題を意識している人、知っている人が多い。

しかし、問題を知らない若い世代の人も多くいる。まず、問題意識をもち、僕のような若い世代がバトンを受け継ぐ気持ちで、活動をしなければならない。引揚者が多くいる黒部市民の一人としても解決に向けた行動をとらなければならないと思う。このような考えをもち、北海道根室市を訪れた。

北海道から、実際に島を見てみると、黒部市から見る能登半島より近い距離感で、齒舞群島の貝殻島まで二・七キロメートルと聞き、泳いで行ける距離だということに驚いた。元島民の得能さんは、「日本全体の問題として、日本全体で返還を呼びかけることが大切。ロシアと交流しながら、日本全体で力を合わせて返還を訴えてほしい。」と語られた。この思いを大切にしたいと、自分は思った。また、納沙布岬からは、ロシアの船や貝殻島、日本の巡視船を見ることができた。貝殻島は肉眼でもよく見え、ロシアの国旗が立てられているのが分かった。

視察事業から数か月が経ち、学校では北方領土学習出前講座が行われた。視察事業で聞くことができなかった具体的な話を聞くことができた。自然環境の面では、固有の鳥

が多く生息し、温泉や美しい滝も見ることができるとい
話が印象に残っている。冬は零下五度程度と寒いので、富
山県民は富山に戻って冬を越したそう。元島民の方の四
島での思い出は、「一面に咲く鮮やかなタンポポ。自然以
外にも何もないのがまたいい。」とのこと。そんな自然豊か
な北方四島。返還のために今日本が行っている活動は、全
国に十五支部ある千島歯舞諸島居住者連盟の活動や、毎年
行われる返還要求大会等、様々な活動があった。数年前
に、ビザなし交流でロシア人と元島民の方が交流したと
きには、「世界の人はみんな同じ人なのだから、仲良くし
たい。」という気持ちだったそう。北方領土返還に向け
て活動をする上で、「若い世代の人たちに北方領土問題へ
の興味・関心をもってもらい、国民として『返してくれ』
という思いをより強くすることが大事だ。」ということも
おっしゃった。

自分たちが、今すべきこととは、まず、北方領土問題に
ついて問題意識をもち、そして、自分事として捉えること
だと思う。個々が問題として捉えることができれば、国民
全体の問題として、「何とかしたい」という考えをもつ人
が増えてくると思う。自分のような世代がそうすること
で、将来の日本が返還要求運動を続けていくことができ
る。そのために、自分が学び、身に付けた知識を発信し、
一人でも多くの人に北方領土問題に興味をもってもらえる
ようにしたい。

今まで意識していなかった人やできなかった人、自分
は関係がないと思っていた人も、問題について知識を増や

し、北方領土について、より多くの人に興味をもってもら
いたい。そのためには、身近に行動しやすい環境をつくる
ことが大切だと思う。個々の考えや行動、興味・関心が国
を動かす大きな歯車として活躍する。運動に興味がないわ
けではない。ロシアにはなく、私たちが願えばいいじゃ
ないか。四島が返ってくるその日まで。

入 選

北方領土の返還について

黒部市立明峰中学校 三年 吉島 あかね

北方領土問題を解決することはできるのでしょいか。私
は、これまでの北方領土学習を通して、大きく二つのこと
が印象に残りました。

一つ目は、「領土の問題」だけではないということです。
これは、北方領土出前講座を通して思ったことです。ビザ
なし交流で北方領土へ行った方によると、現地の環境が悪
化していたそうです。下水道設備等が整っておらず、水の
色が濁って悪臭がしたり、ゴミの山から煙が出ていたり。
さらに、道路や洋風の建物が作られ、元々あった美しい自
然がなくなっていました。ロシアは、領土を奪っただけで
はなく、北方領土の特色である自然まで奪ってしまったの
です。また、北海道の納沙布岬から歯舞群島の貝殻島まで
三・七キロメートルと、目で見えるほど近い距離なのに私

私たちは簡単に訪れることもできません。元島民の方々ですら故郷に行けないというのはとてもひどいことです。今までは私は、領土が日本へ返還されることだけを願っているのだと思っていました。しかし、実際はただロシアと条約を結んで領土を返させるだけで解決する単純な問題ではないのだと知りました。

二つ目は、返還要求運動についてです。日本はこれまでロシア人との交流会やビザなし交流等の友好活動をはじめ、より多くの人に北方領土のことを知ってもらうための北方領土出前講座、動画やテレビでの情報発信活動を行ってきました。しかし、直接的に問題解決につながるような動きはあまり見られません。むしろ、ロシアがウクライナと戦争を始めてからは交渉がしづらくなり、状況は悪化していると言えます。私はこの状況について今すぐに問題を解決することはできないのではないかと考えました。だからこそ、今の私たちにできる活動を地道に積み重ねていくことが、将来的に問題の解決につながると思います。

二つのことを踏まえて、中学生の私にもできる返還のための活動を考えました。それは北方領土学習を通して学んだことや、「返してほしい」という元島民の強い思いを、より多くの同世代の人たちに広めることです。私は、北方領土の歴史や現状を知っている人、返還を願っている人が増えれば、問題解決により近づくと思います。だから、交流会や北方領土出前講座に参加することが難しくても、身近で取り組みやすい活動に関わることが大切です。具体的には、北方領土に関する動画やテレビ番組を見ることが、署

名運動に参加すること、友人や家族に話すことなどです。これらの活動の一つひとつは小さくても、必ず問題解決につながっていくはずです。

特に、私は若い世代の人たちが、北方領土についての知識を身に付けるべきだと思います。未来を担う私たちが、北方領土の返還についての強い思いをもつことで、一歩ずつ解決に向かっていくことを強く願っています。

入 選

私たちの意識改革

黒部市立明峰中学校 三年 経 ゆい

北方領土に深い関わりをもっている北海道根室市は、黒部市と姉妹・友好都市です。しかし、私は今まで北方領土について意識をしたことはほとんどありませんでした。総合的な学習の時間に、北方領土に関するビデオを見たり、インターネットや本等で調べ学習を進めたりする中で、それは日本が抱えているとても重要かつ有名な問題の一つだと知りました。しかし、知らなかったことの方が多く、関心をもっていなかった自分自身に対して衝撃を受けました。さらに、北方領土出前講座や調べ学習を通して、北方領土の歴史や現状について、より深く知ることができました。北方四島は、戦後、ソ連に法的根拠なく占拠され、日本の領土にも関わらず日本人が自由に行き来することがで

きません。その理不尽さに憤りを感じ、故郷に今も帰ることができない人々の辛い思いを想像すると心が痛みます。私は今まで、北方領土問題は返還に関することだけというイメージをもっていました。しかし、返還のみならず、間違った開発が進んで自然や生息している生き物たちが減ったりなどといった、豊富な地下資源や水産資源が取れなくなったりなどといった、環境や資源の問題にもつながっていることを知りました。

また、納沙布岬から北方領土までの距離が三・七キロメートルととても近くて驚きました。根室から北方領土を見ることができたり、根室市内にロシア語の表記や授業があったりすることからも、根室に住む人々にとって北方領土は本当に身近な存在で、向き合っていかななくてはならない問題であることが分かりました。しかし、私のように北方領土問題に対して認識の薄い人が多いのが現状ではないのでしょうか。もつと一人一人が自分自身の問題として捉えていく必要があると思います。そして、そのような意識が少しずつ日本全体へと広がっていったらいいなと思いました。

現在では、元島民の平均年齢が八十八・五歳と高齢化しており、次の世代に語り継いでいく必要があります。その一方で、若い世代の興味・関心の低さが課題の一つとなっています。私たちは日本国民として北方領土問題に向き合い、調べ学習や講演会等で学んだことを生かして情報を発信していく姿勢をもつことが大切だと感じました。

北方領土は我が国固有の領土であり、一日も早く返還してほしいという思いと同時に、北方領土問題の難しさや複

雑さを実感しました。それでも諦めずに、署名活動や講演会等の返還運動に取り組んでいる方々がいます。例えば、先日、根室市の高校生が北方領土について語る講演会が本校で開かれました。それを聞いた私たちが興味を抱いたように、他の都道府県にもそのような活動が広がっているか。正しい知識や現状を知る人が増えれば、返還運動ももつと盛んになり、日本全体で北方領土に対する関心が高まっていくと思います。私たちも「北方領土を返してほしい」という声を上げ続けていきたいです。

入 選

情報発信者の一人として

黒部市立明峰中学校 三年 宮寺 奏和子

「北方領土問題」。私がこの問題に興味をもつきっかけを与えてくれたのは祖父でした。祖父の父である曾祖父は、かつて富山県と北方領土を船でつなぐ商人だったそうです。当時の北方領土には、曾祖父のように昆布漁などに携わる富山県の人々も大勢住んでおり、その島々は紛れもなく日本の国土だったと祖父からよく聞かされました。しかし、終戦と同時にソ連軍の侵攻によって島民は島を追い出され、現在に至るまで島はロシアによって不法に占拠され続けています。

私は、「なぜこんなことになったのか、どうすればこの問題を解決できるのか」という思いを胸に、今年の夏、富山県北方領土復帰促進少年少女北海道派遣団の一員として、北海道根室市を訪問しました。私たち派遣団は、北方領土復帰促進根室市民大会に参加し、現地の声を生で聞くことができました。「北方領土を返してほしい。」「故郷に帰りたい。」どの話からも北方領土への強い思いが伝わってきて、胸を打たれました。その中でも特に印象的だったのはこの言葉です。

「元島民の平均年齢は八十八・五歳。残された時間は限られている。」

私は、この言葉を聞くまで北方領土問題は難しい問題で、解決にはまだまだ長い時間がかかると思っていました。しかし、この思いもよらぬ言葉を聞いて強い衝撃を受け、「早く何とかしなければ」という焦燥感にかられました。そして、さらに追い打ちをかけるように、元島民の方から北方領土問題の厳しい現実について話を伺いました。日本は自国の海であるにも関わらず、北方領土近海では自由に昆布漁をさせてもらえないこと。もし日本の漁船が北方領土の島々に近づくと、ロシアに拿捕されてしまうこと。そして、現在は日露情勢の悪化により、数年前まで行っていた北方領土へ墓参する機会も失われていること。初めて耳にしたこれらの話は理不尽なものばかりで、私は言葉を失いました。

しかし、この現状を知る日本人はいつたどれほどいるのでしょうか。北方領土返還を心から願って声を上げ続ける

ている人がいる一方で、多くの国民はどんな北方領土に対する興味や関心が薄れていつているように感じます。祖父も「以前ほど『北方領土返還!』の言葉を聞かなくなっ

てしまいい寂しい」と嘆いていました。北方領土問題は国民全体の問題なのに、このままでは問題が風化していく一方ではないでしょうか。

そこで、私は北方領土の現状について広く知ってもらうことが解決への第一歩だと考えました。北海道で現地の人々の声を生で聞くことができた私は、これからは情報発信者の一人として周りの人たちに伝えていこうと思います。この問題を元島民だけの問題で終わらせないために、これからの時代を生きる私たちが彼らの思いを引き継ぎ、北方領土の早期返還を実現せねばなりません。元島民の方々はもちろん、日本国民が自由に島を行き来できる日が一日も早く来るように、私は彼らの代弁者となり、声を上げ続けたいと思います。

入 選

北方領土と私

射水市立小杉南中学校 三年 金山 伶

北方領土はいつ返ってくるのだろう。私は北方領土関連のニュースを見るたびにそう思う。小学校から中学校のすべての教科書には北方領土は日本の領土であると書いてあ

る。しかし、私が生まれる前から北方領土はロシアが占拠
していて、北方領土には多くのロシア人が住んでいるとい
うことも知っている。もう北方領土はロシアのものなので
はないだろうか。そうだとしたら、本当に北方領土は日本
に返ってくるのだろうか。私はそう疑問に思い、北方領土
について調べてみた。

北方領土の面積は約五千平方キロメートル。大体、福岡
県や愛知県と同じぐらいの大きさだ。日本の領土の一・三
パーセントを占めるほどらしい。日本が持つ貴重な領土を
他国に渡すわけにはいかない。日本が北方領土を返してほ
しいと粘り続ける理由の一端がこれだろう。さらに、ロシ
アは大国であり、現在ウクライナに侵攻している。そんな
隣国と陸続きになっていて、いつでも攻められる状態に
なっているというのは危険極まりない。

では、ロシアとの返還交渉はうまくいっているのだろうか。
結論から言えば、うまくはいっていない。まず、北方
領土問題の原因とも言えるのが、ソ連軍が日ソ中立条約を
破って満州や北方四島に侵攻したことである。これに対し
て、日本は四十九か国の署名により結ばれたサンフランシ
スコ平和条約で、樺太・千島交換条約で得ていた千島列島
を放棄。しかし、北方四島はその放棄地には含まれないと
いう姿勢をとっている。だが、ソ連はこのサンフランシス
コ平和条約に署名していない。そうになると、サンフランシ
スコ平和条約にロシアは従う必要がない。その後の日ソ共
同宣言で、歯舞群島と色丹島の返還が合意されるも、残り
の択捉島と国後島の扱いについては意見が食い違ってし

まった。これは一九五一年に日本が千島列島に択捉島と
国後島は含まれないと説明したことも一因である。しか
し、日本はその後の一九五六年の二月に、これを撤回。四
島とも千島列島に含まれないという姿勢を現在まで崩して
いない。だが、現在ロシアや英語圏では、千島列島には択
捉島と国後島が含まれるというのが一般的な認識となつて
おり、千島列島の認識が日本とロシアで食い違ってしまう
ている。このようなことが背景にあり、北方領土の返還交
渉は現在難航している。ここまで調べたとき、私は「なぜ
日本は色丹島と歯舞群島だけでも返してもらわなかったの
だろう。折り合いをつけて早期に解決してしまえば問題が
ここまで長期化することはなかっただろうし、故郷に帰る
ことができた人もいたのではないか。」と思った。これを
母に言ってみると、母は困ったように「一概にそれが正し
いとは言えない。それでは日本が舐められてしまうから。」
と返してきた。そこまで聞いて私は、日本には中国や台
湾、韓国とも尖閣諸島や竹島を巡って領土問題が存在する
ことを思い出した。もし、日本が色丹島と歯舞群島のみで
よいと妥協してしまったら、それらの領土問題で不利に
なってしまうかもしれない。日本は他国から粘れば領土を
渡してくれる国だと思われてしまう。さらに、領土問題が
存在しない国からも軽視され、外交で不利になるかもしれ
ない。そう考えていくと、先程まで私が思っていたことは
まずいことだと分かる。だから、日本は私が生まれる前か
らずっと北方四島の返還を求めているのだと納得すること
ができた。

入 選

北方領土問題

射水市立小杉南中学校 二年 田村 優哉

私が「北方領土」という言葉を知ったのは、小学生の頃でした。その頃は、複雑で難しく、あまり興味がなかったこともあり、言葉の頭の中に残っていました。現在、中学二年生になり、歴史や世界情勢を勉強していく中で、背景や経緯について理解できるようになったため、「北方領土問題」について調べてみることにしました。

「北方領土」とは、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島から成り立っています。そして、日本はロシアより早く北方四島の存在を知り、多くの日本人が移り住み、開拓し、統治してきた土地でしたが、戦争が終わった後からソ連が北方四島の全てを占領しました。ソ連は四島を一方的に自国領にし、全ての日本人を強制退去させまし

た。そして、今日に至るまで、ロシアによる不法占拠が続いています。

私は、この歴史と経緯を学ぶ中で、自分たちで開拓した自分たちの土地を退去させられた元島民は、すごく悲しい思いをしただろうと思いました。今でも四島に渡航することとは、あたかもロシア領土であることを認めることにつながるといった日本政府の考えから、特例の場合に限られていることを知りました。また、調べていく中、語り部をされている元島民の方の話を動画で視聴しました。その内容は、ソ連軍に学校を襲われたという当時の怖い話でした。すでに高齢で、語り部を引退する歳になったとのことでしたが、元島民が「語れるうちは頑張って語りたい。」と話されていたのが印象に残りました。また、動画の視聴者や日本国民に伝えたいこととして、「この問題は、元島民だけではなく、日本の歴史の一つなのだから、頑張ってもらいたい。」と話されていました。私は、自分たちにも関係のある問題として考えなければいけないと感じました。

私は、自分たちに何ができるのかを考えました。その中で、北方領土問題を多くの人に知ってもらうことが重要だと思いました。その理由は、たくさんの方がこの問題を知ること、関心をもつ人が増えるからです。私たちの世代の中には、「昔のこと」「自分には関係のないこと」だと思い、興味が無い人が多いと思います。しかし、「現在も続く解決していない問題」であるということを知ること、関心をもつことができるのではないかと思います。

入 選

北方領土と向き合う

射水市立大門中学校 二年 林 真紗斗

まず、広く知ってもらうためには、私が視聴した元島民の方の動画のように、インターネット等を利用して、もっと多くの人に視聴できる機会があればいいと思いました。その他にも、署名活動です。署名を集めることも北方領土問題を多くの人に知ってもらうことができる機会になると思います。

私は、私たちの世代も、北方領土問題について関係がないことだと思わずに、歴史や背景について、さらに学ぶ機会をつくって、関心をもち続けていくことが重要だと感じました。

「北方領土」そう聞いて、僕は領土問題を思い浮かべました。おそらく、そう考えた人が多いのではないのでしょうか。「では、その問題に対して、皆さんはどう思いますか。」この質問は、僕が北方領土と大きく関わるきっかけとなった質問です。僕は「引揚者のために何かしたい。」と答えました。今思えばその考えは少し甘かった気がします。

僕は今年の夏、北方領土青少年等現地視察事業に参加し、北海道本島で最も東にある根室市に行きました。僕は、「なぜこれだけ長い月日が経っても北方領土は返還さ

れないのかを探る」という個人目標を立てて、事業に参加しました。事業では様々な活動を行ってきました。納沙布岬では北方館を訪れて当時の生活の様子を学んだり、四島のかけ橋を見たり、根室市長や元島民の得能宏さんの話を聞いたり、羅臼国後展望塔から自分の目で国後島を見たりと、とても内容の濃い時間を過ごしました。

僕はこの事業を通して、主に二つの学びを得ました。

一つ目は、自分の考えが甘いということです。僕は羅臼の漁業関係の方に質問されました。「北方四島は返つてくると思えますか。」という問いに対し、僕は「はい」と答えました。しかし、その方は続けて「こんなに長い時間が経つても返つてこないのだから、もう北方四島は返つてはこないよ。」と言われました。僕は冗談のつもりで言われたのだと思いましたが、よく考えると、それは心の底から言われていることが分かりました。今日までたくさんの人たちが北方四島返還のために活動してきましたが、北方四島は返つてはきませんでした。加えて、ロシアのウクライナ侵攻により、ビザなし交流も島への墓参もできなくなりました。できることをやり尽くした今、何をすれば北方四島が返ってくるのかを考えることが重要になると考えました。

二つ目は、最初に立てた個人課題への答えです。僕は島々を自分の目で見た時も、元島民の方のお話を聞いた時も、悔しいという感情を抱きました。なぜ悔しいと感じたかという点、僕が無知で何もしてあげられていないからだとか分かったからです。今もなお四島返還のために努めている人がいるのに、自分は何もできていないと思うと、とて

も悔しく思いました。しかし、悔しいと思うと同時に、四島返還のために自分は何ができるのだろうか、考えることができました。そして、僕は北方領土問題について、一人一人が理解することが重要だと感じました。問題について理解してもらうことで、「何か力になりたい」「自分は何ができるのだろうか」と考える人が必要だと思いました。

現在、ロシアがウクライナ侵攻を続けている他、ビザなし交流や島への墓参ができないなど、四島返還に向けた情勢はとても厳しい状態です。しかし、僕は一人でも希望をもっている人がいれば、いつかまた日本人が住める「日本の島」になると信じています。そして、それが一日でも早く実現できるように、僕は今回の事業を通して学んだこと、感じたこと、見たこと、聞いたことなど、どんなことでもよいので、一人でも多くの人に北方領土に興味をもってもらえるよう、話していきたいと思います。

入 選

自分たちができること

氷見市立北部中学校 二年 廣瀬 遙斗

僕は夏休みの初め、「北方領土を考える東海・北陸ブロック中学生のつどい」に参加しました。参加すると決まっただけで、ニュースやインターネットを利用して北方領土についての知識を付けようとたくさん勉強をしまし

た。すると、今まで知らなかった情報がたくさん出てきて、とても驚き、授業で習う部分はほんの一部にすぎなかったのだと知りました。

「中学生のつどい」で最も大きく挙げられた問題は、「若者の関心が低い」というものです。今年で終戦七十九年を迎え、戦争経験者、戦争に参加した人は年々少なくなってきています。しかし、北方領土問題は解決しておらず、元々北方領土に住んでいた方々は北方領土の返還を強く望んでいます。そこで、若者が思いを引き継ぎ、何か行動を起こしていかなければいけません。

では、若者の関心を高めるためにはどのような取り組みを行えばよいのでしょうか。僕が考えた方法は、若者同士の話し合いの場を設けるというものです。学校の教育ではこういった話し合いを行うことは簡単ですが、大人になってからは話し合う機会はなかなかありません。そこで、定期的に話し合いを行うことで、北方領土問題を若者たちにとって身近なものにすることができないのではないかと思います。この案にはいくつかのメリットがあります。一つ目は、北方領土の幅広い知識をもった人々が増えるということです。詳しい人が増えると、小さい子への教育や周りの人への発信も可能になります。二つ目は、国や世界へのアピールにつながるということです。これは、北方領土問題解決の第一歩です。真剣に取り組もうとしている人が増えていくことを国が知ったら、国はさらに様々な取り組みを行ってくれると思います。このためには話し合いの規模を大きくしなければいけません。不可能ではないと思う

ので、いつか実現されるとうれしいです。

また、ただ話し合いを行うだけでは意味がありません。話し合いで出た意見の中からいくつか選び、行動に移していく必要があります。例えば、お金を払って島を一つずつ返してもらうという意見が出た場合、全国または世界各地で募金活動を行い、日本政府に提出するなど、ボランティア団体等と協力して行うことができると思います。これはあくまで例ですが、話し合いを何度か繰り返し行うことで、これまで誰も思いつかなかった意見が生まれる可能性もあるので、実現されたら参加してみたいと思います。

今回、僕は北方領土問題の解決に向けて、話し合いを一つの案として出しました。日本とロシアも話し合いを何度も行つて、領土問題を解決につなげてほしいと思いました。正直、一般人の力だけでは問題解決することは難しいため、自分たちにできること、例えば、署名運動や北方領土についての話し合いに参加するなど、まずは北方領土問題について詳しく知ることから始めても遅くないと思います。国民一人一人が他人事という考えを捨てて、自分にできることをするのが北方領土返還の近道だと思います。

「第18回『私たちと北方領土』作文コンクール」入賞者一覧

賞 名	題 名	名 前	市町村名	学 校 名	学年
富山県知事賞	返還への第一歩	金森 美咲	入善町	入善町立入善西中学校	2年生
北方領土問題対策協会 理事長賞	「それ」が目指すもの	近川 藍子	黒部市	黒部市立清明中学校	3年生
北方領土返還要求運動 富山県民会議会長賞	北方領土問題、まずは知ることから	松代航太郎	高岡市	高岡市立福岡中学校	2年生
富山県教育委員会 教育長賞	北方領土のために私ができること	島 詩月	魚津市	魚津市立東部中学校	3年生
富山県市長会会長賞	北方領土問題を解決しよう！	杉本 俊希	射水市	射水市立小杉南中学校	2年生
富山県「北方領土問題」 教育者会議会長賞	ロシア人の「当たり前」	水野 一真	黒部市	黒部市立明峰中学校	3年生
入 選	北方領土の返還を実現させるために	米澤英里奈	入善町	入善町立入善中学校	2年生
入 選	北方領土問題と私	池村 麻里	黒部市	黒部市立清明中学校	3年生
入 選	知るをあなどるな	新村 吉平	黒部市	黒部市立清明中学校	3年生
入 選	次の世代に想いをつなぐために	氷見 芽子	黒部市	黒部市立清明中学校	3年生
入 選	美しい故郷をもう一度	堀 由梨奈	黒部市	黒部市立清明中学校	3年生
入 選	北方領土は日本の領土	横山 響栄	黒部市	黒部市立清明中学校	3年生
入 選	北方領土の返還について	吉島あかね	黒部市	黒部市立明峰中学校	3年生
入 選	私たちの意識改革	經 ゆい	黒部市	黒部市立明峰中学校	3年生
入 選	情報発信者の一人として	宮寺奏和子	黒部市	黒部市立明峰中学校	3年生
入 選	北方領土と私	金山 怜	射水市	射水市立小杉南中学校	3年生
入 選	北方領土問題	田村 優哉	射水市	射水市立小杉南中学校	2年生
入 選	北方領土と向き合う	林 真紗斗	射水市	射水市立大門中学校	2年生
入 選	自分たちにできること	廣瀬 遥斗	氷見市	氷見市立北部中学校	2年生

第18回「私たちと北方領土」作文コンクール

【趣 旨】 北方領土という日本の領土でありながら日本人が自由に往来できない地域があるという現実を中学生が正しく理解し、関心を引き起こすことを目的とする。

【主 催】 北方領土返還要求運動富山県民会議
富山県「北方領土問題」教育者会議

【後 援】 富山県、富山県教育委員会、独立行政法人北方領土問題対策協会、
富山県市長会、富山県町村会

【テ ー マ】 「北方領土に関すること」（題名は自由）

【応募方法】 (1)対 象 県内の中学校に在学している者
(2)募集期間 令和6年7月～令和6年11月22日
(3)作品規定 原稿用紙（400字詰）3枚～4枚
(4)優秀作品の選定 各中学校において優秀作品10編以内を選定し、提出する。
(5)提 出 先 北方領土返還要求運動富山県民会議
〒930-8501 富山市新総曲輪1-7 富山県経営管理部行政運営課内

【応募状況】

学 校 名	応 募 総 数			
	1 年	2 年	3 年	計
入善町立入善中学校	0	3	0	3
入善町立入善西中学校	1	3	0	4
黒部市立清明中学校	0	0	147	147
黒部市立明峰中学校	0	0	197	197
魚津市立東部中学校	0	0	9	9
立山町立雄山中学校	0	0	18	18
舟橋村立舟橋中学校	1	3	5	9
片山学園中学校	4	3	0	7
高岡市立福岡中学校	0	2	0	2
射水市立新湊中学校	0	2	0	2
射水市立小杉南中学校	18	10	12	40
射水市立大門中学校	22	7	1	30
氷見市立北部中学校	0	4	0	4
合 計	46	37	389	472

【審査内容】

- 審査基準 ①北方領土問題を正しく理解されていることが表現されている、又はそのことがうかがえる。
②北方領土問題を身近な問題として捉え、自らの意見や考えが表現されていること。
③文章の構成や表現力が優れていること。
- 審査結果 26ページに掲載

参 考 資 料



北方領土ってどこにあるの？

◆北方領土の位置について

「北方領土」とは、北海道の東にある根室半島につらなる^{はばまいぐんとう}歯舞群島、^{しこたんとう}色丹島、^{くなしりとう}国後島、^{えとろふとう}択捉島の4つの島々のことです。これらの島々は「北方四島」とも言います。

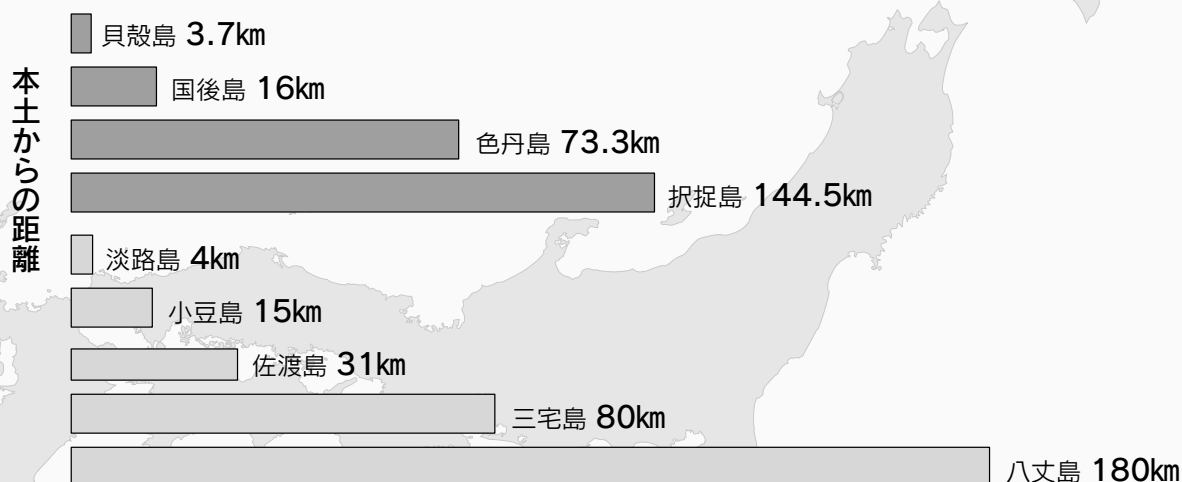
北方領土はとても遠い場所だと思っているかもしれませんが、最も近い歯舞群島の貝殻島までは、北海道本島からわずか3.7kmしか離れておらず、望遠鏡で灯台をはっきり見ることができます。

また、国後島までは16kmで、本土と佐渡島との距離（31km）の約半分です。色丹島までは73.3km、択捉島までは144.5kmという距離です。北方領土とはこんなに近くにある島々なのです。



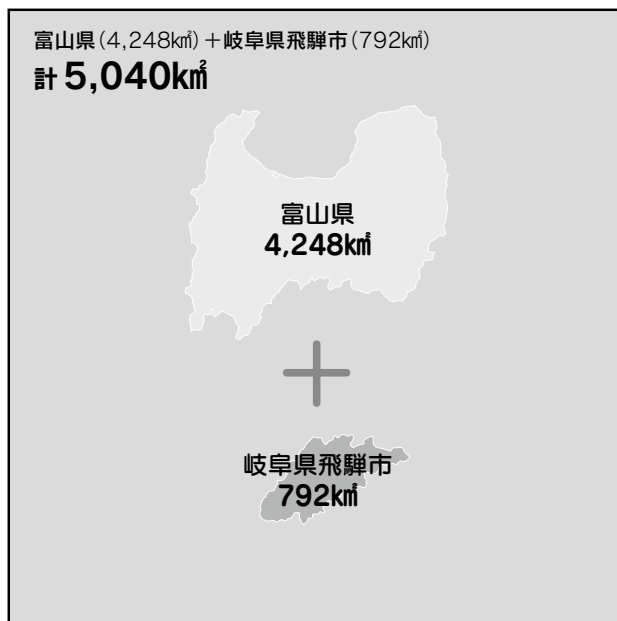
●こんなに近い北方領土

最も近い歯舞群島の貝殻島は、納沙布岬からわずか3.7km、一番遠い択捉島までは144.5kmです。

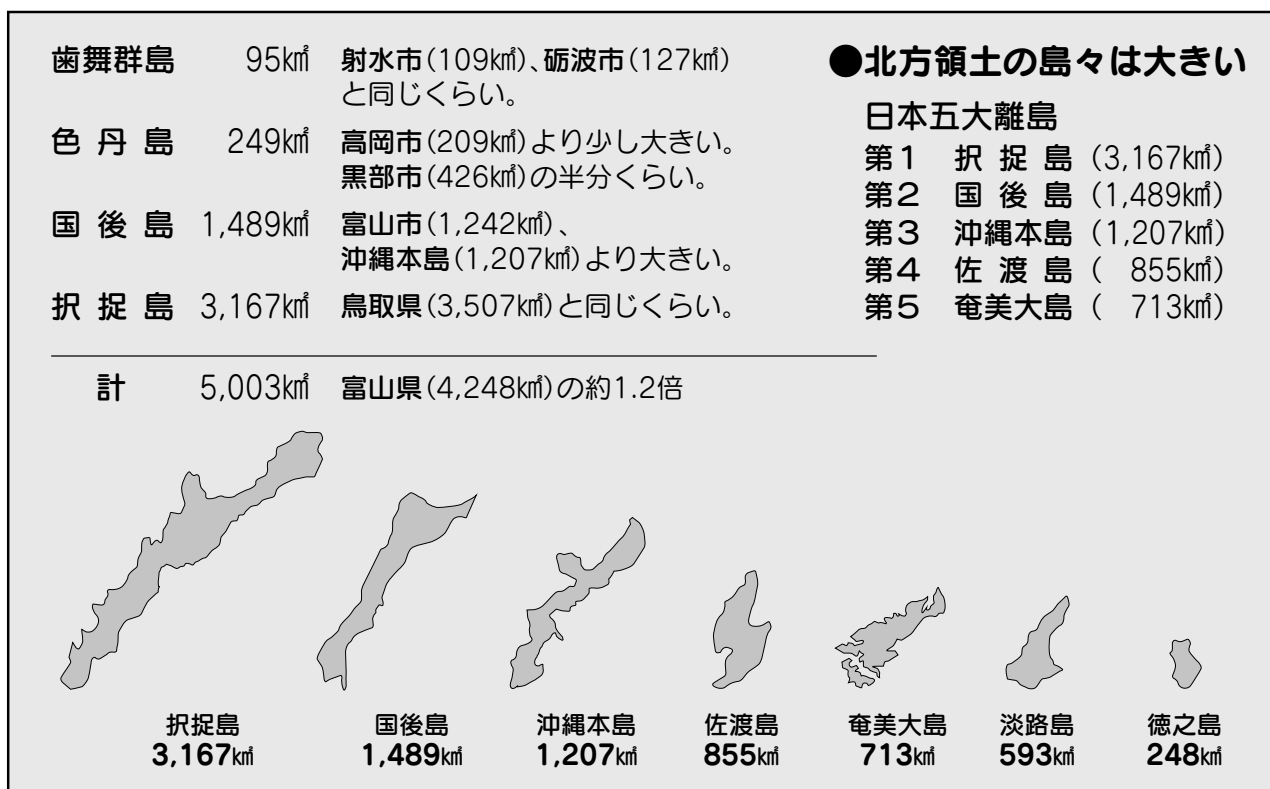


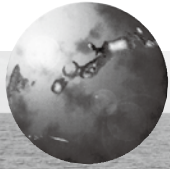
◆北方領土の面積について

北方領土の面積の総計は、5,003km²で、富山県の面積（4,248km²）の約1.2倍の広さです。国後島と択捉島は、沖縄本島より大きな島で、一番大きな択捉島（3,167km²）は鳥取県（3,507km²）と同じくらいの広さです。



北方領土の面積を日本各地の島々や県・市の大きさと比較してみましょう。





北方領土ってどんな島なの？

北方領土の中でも、国後島と択捉島には、海拔1,500mを超える山がありますが、歯舞群島と色丹島は、ゆるやかな起伏のある土地です。

北方領土には、キタキツネ、ゴマフアザラシ、オットセイ、トドなどたくさんの動物が住んでいます。国後島や択捉島には、ヒグマも住んでいます。また、エトピリカ、エゾライチョウ、オジロワシといった珍しい鳥も多く見かけます。

北方領土の周辺の海は、暖流と寒流が交わる場所であるため、世界3大漁場のひとつとなっています。特に、サケ、マス、タラ、タラバガニ、コンブ、ホタテなどの宝庫です。



北方領土というと、厳しい寒さを想像するかもしれませんが、海流の影響のため、冬は北海道の内陸部より暖かく、雪も少ない場所です。2月の平均気温は、マイナス6℃前後です。

夏は、一番暑い8月でも月の平均気温が16℃で、あまり高くありません。夏は、海霧（ガス）がかかって日照時間が少ないことや、オホーツク海から冷たい空気が入ってくるからです。

◆北方四島での人々の生活

第二次世界大戦終了後、ソ連軍に占領されるまで、北方四島には日本人が住んでいました。

北方四島の住民のほとんどは、漁業に従事していました。はじめは親方（網元）に雇われていた人が多かったのですが、やがて独立して、家族とともに移り住むようになっていったのです。

島での住宅は、ほとんどが木造であり、風が強い土地であったことから平屋造りで小さなものでした。

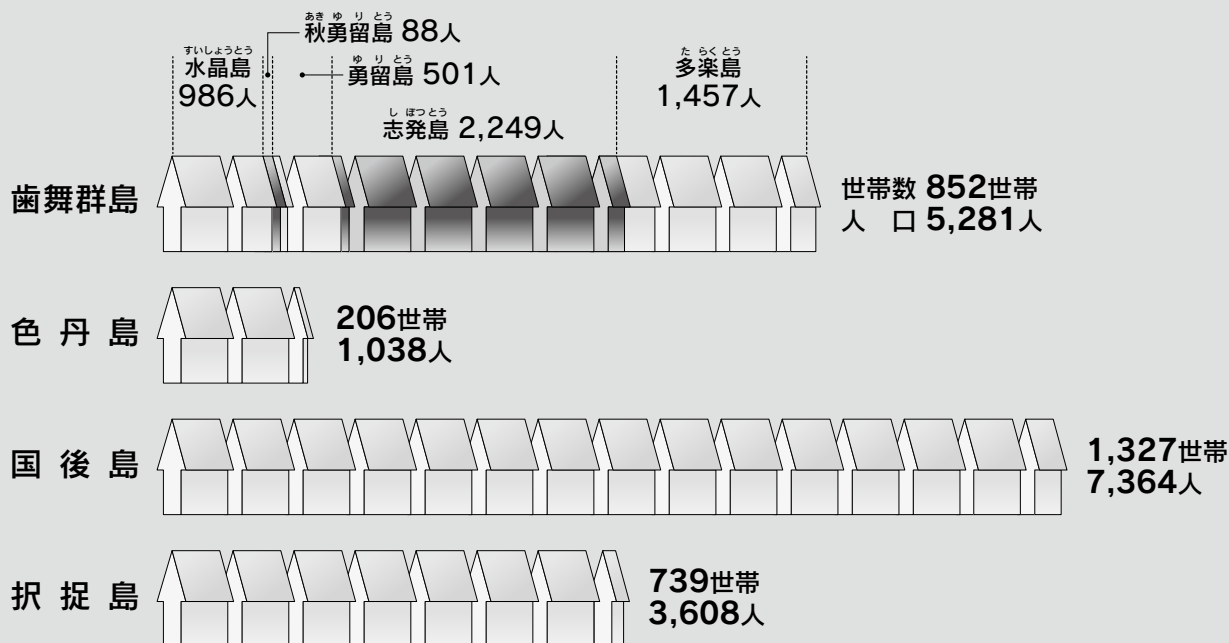
日常生活に必要なものの大部分は、船で北海道本島から運ばれてきました。そのため、輸送費がかかり、島での物価は高かったといわれています。その上、冬の間は暴風や流水でしばしば船が来なくなり、新聞や郵便物のほか、日常の品の運搬も長くとだえることがありました。そのため、島では、食料などの必要な品物は、翌年の春までの分を秋のうちに買い入れておきました。

最も困るのは、急病人やけが人が出た時でした。島には、医者も病院も少なく、設備も整っていませんでした。そのため、急病人の手当が間に合わないことも多くありました。

このように、島での生活は、不便なことや困難なことも多かったのですが、豊かな漁場や森林などに恵まれていたため、生活は次第に豊かになっていきました。島をふるさとと決めた人々は、将来に明るい希望を持って、一生懸命に働きました。

●北方領土元居住者(3,124世帯、17,291人)

※1945年(昭和20年)8月15日現在



注：平成18年3月千島歯舞諸島居住者連盟調べ



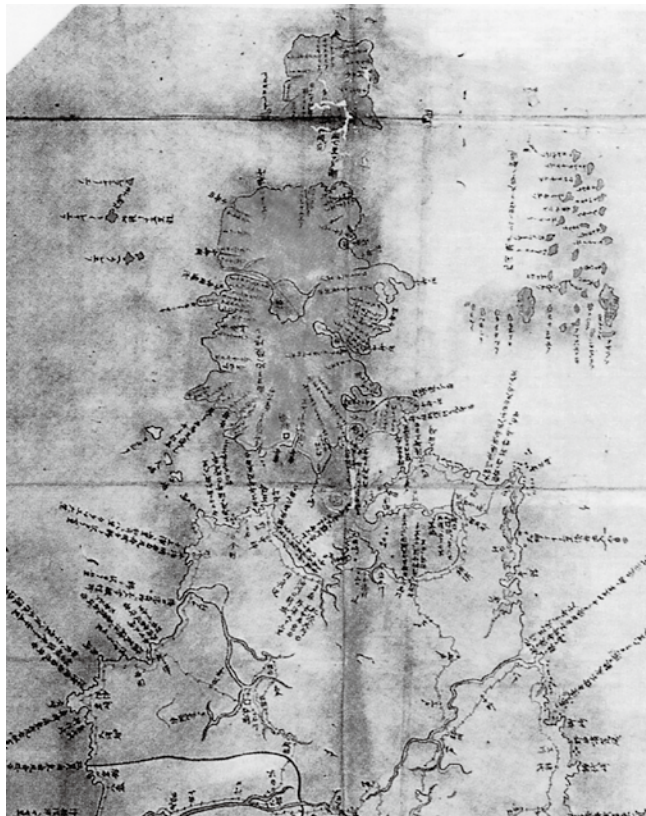
北方領土は日本の島なの？

日本が、北方の島々のことを知ったのは、17世紀初め頃です。

1644年（^{しょうほ}正保元年）に江戸幕府が「^{しょうほ おくにえず}正保御国絵図」という地図を編さんしましたが、このとき松前藩が幕府に提出した自藩領地の地図には「くなしり」「えとろほ」など、現在の島名と同じ名前が書かれています。

ロシア人が初めて千島列島（^{しょうとく}千島列島）を探検したのが1711年（正徳元年）のことですから、約100年も前から日本は北方の島々とかかわりをもっていたのです。

●正保御国絵図1644年（正保元年）

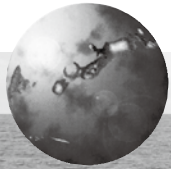


18世紀後半になると、国後島、^{もがみとくない}択捉島を中心に、最上徳内、^{たかだやかへえ}高田屋嘉兵衛、^{こんどうじゅうぞう}近藤重蔵といった日本人が活躍しました。

江戸幕府は1798年（^{かんせい}寛政10年）、蝦夷地（北海道）に大規模な調査隊を派遣しました。このとき、近藤重蔵が最上徳内とともに^{だいにっぽんえとろ}に択捉島に渡り、「大日本恵登呂

^ふ府」と書いた標柱を建て、日本の領土であることを明らかにしました。

このような歴史的事実や当時の実情から考えても、北方領土は古来からの日本の領土なのです。



北方領土の国境はどうなっているの？

1855年（安政元年）、日本とロシアの間で「日魯通好条約」が結ばれました。この条約で、両国の国境が択捉島とウルップ島の上に定められました。ウルップ島から北の千島列島はロシアの領土、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四島は日本の領土であることが、この条約によって法的に確定したのです。このとき、樺太（サハリン）については、国境は決めませんでした。

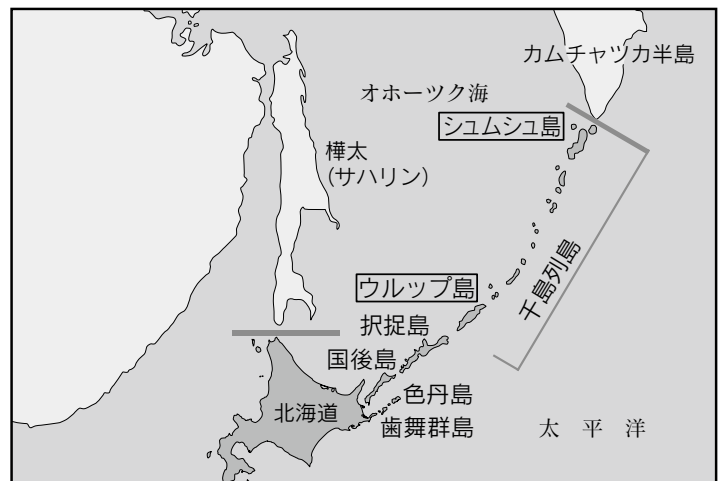
1875年（明治8年）、日本はロシアと「樺太千島交換条約」を結びました。日本は樺太での権利を放棄するかわりに、千島列島をロシアから譲り受けたのです。この条約には、譲り受ける千島列島として、シムシュ島からウルップ島までの18の島の名前が挙げられています。つまり、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四島は、千島列島には含まれないということなのです。

1905年（明治38年）、日露戦争の結果、日本とロシアは「ポーツマス条約」を結びました。このとき、樺太の南半分が日本の領土となりました。

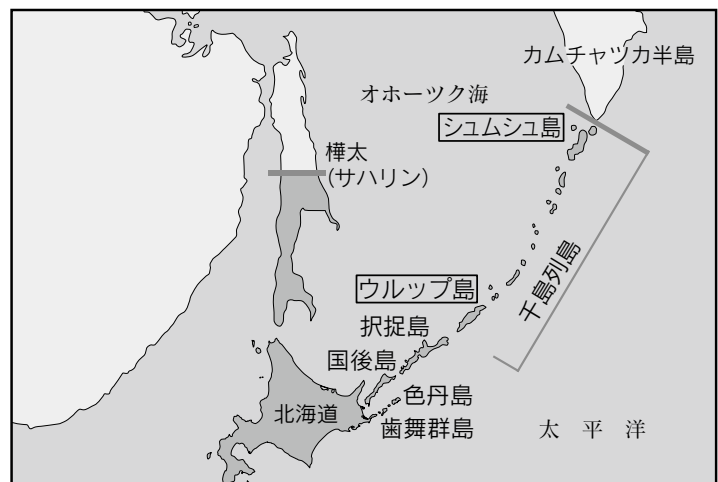
●1855年の日魯通好条約に基づく国境線



●1875年の樺太千島交換条約に基づく国境線



●1905年のポーツマス条約に基づく国境線



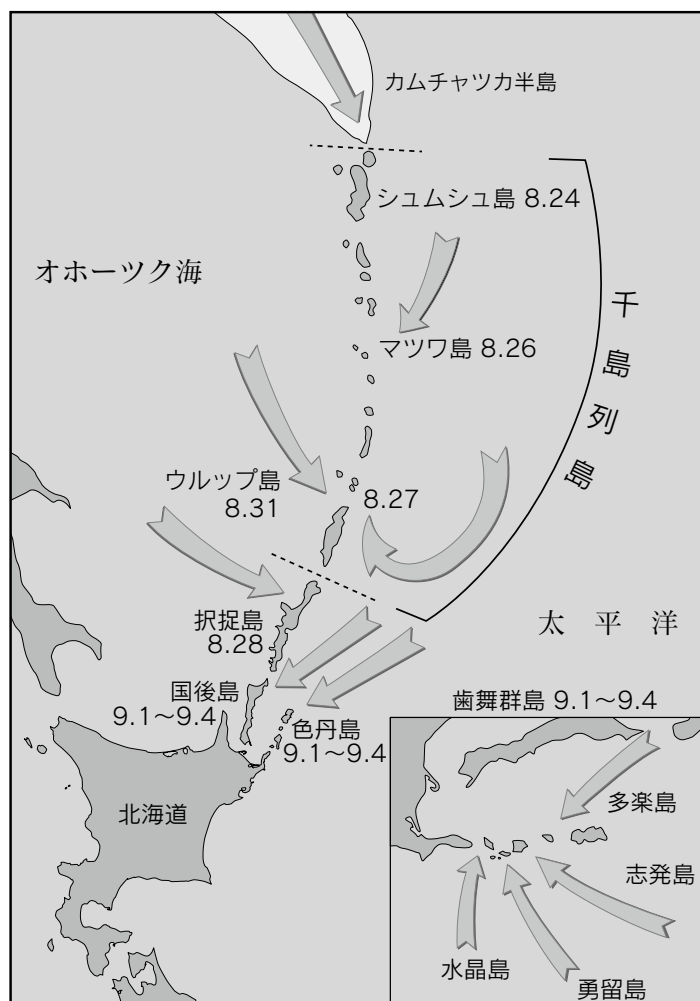
第二次世界大戦末期の1945年（昭和20年）8月9日、ソ連は当時有効だった「日ソ中立条約」（1941年締結）を一方的に破棄して、日本に対し宣戦しました。ソ連軍は、第二次世界大戦終了後の8月18日より千島列島への攻撃を開始し、8月28日に択捉島に上陸、次いで国後島、色丹島、歯舞群島と、遅くとも9月5日までに、これら四島をすべて占領してしまいました。

その後、現在まで、これら北方四島は、ソ連（現在のロシア）に不法占拠された状態が続いています。

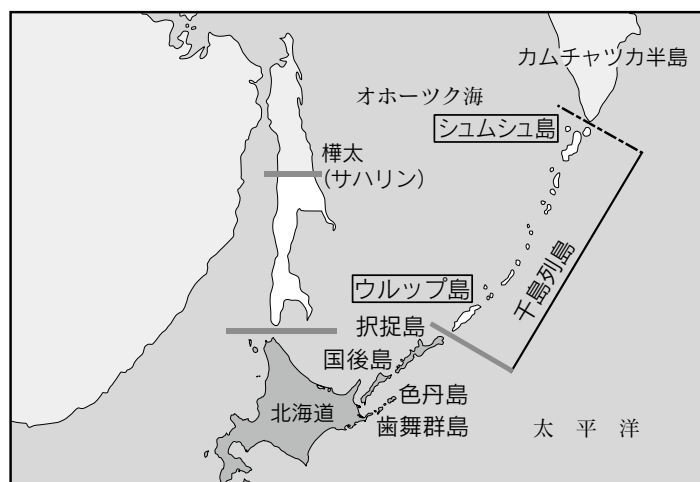
1951年（昭和26年）、日本は「サンフランシスコ平和条約」に調印し、千島列島と南樺太を放棄しました。このとき、日本が放棄した千島列島とは、ウルップ島から北の島々のことで、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四島は含まれていません。

ソ連が「サンフランシスコ平和条約」に加わらなかったため、日本とソ連は、1956年（昭和31年）、「日ソ共同宣言」に署名し、国交を回復しました。「日ソ共同宣言」では、領土問題について、平和条約締結後に、歯舞群島と色丹島を日本に引き渡すことに同意しています。

●ソ連の不法占領



●1951年のサンフランシスコ平和条約に基づく国境線





日口間の最近の動きはどうなっているの？

日本とロシアの間では、領土問題を解決し、平和条約を締結するための外交交渉が粘り強く続けられてきました。

1993年（平成5年）に合意された「東京宣言」では、領土問題を北方四島の帰属の問題と位置づけるとともに、領土問題解決のための交渉指針が示されました。

2003年（平成15年）には「日口行動計画」が採択され、領土問題に関しては「日ソ共同宣言」や「東京宣言」などの諸合意を基礎に交渉を加速させることが確認されました。

2016年（平成28年）には、安倍総理大臣とプーチン大統領との間で、北方四島において共同経済活動を行うための協議の開始が合意されました。

2018年（平成30年）に行われた日口首脳会談では、「日ソ共同宣言」を基礎として平和条約交渉を加速させることが合意され、その後行われた日口首脳会談でも、引き続き平和条約交渉に取り組んでいくことが確認されていました。

そんな中、2022年（令和4年）2月にロシアによるウクライナ侵略が始まりました。その後、ロシアは平和条約交渉を継続しないことや四島交流等の事業に関わる合意の効力停止などを一方的に発表しました。

現在の日口関係は厳しい状況にあります。日本政府は、領土問題を解決し、平和条約を締結する方針を堅持しています。



●東京宣言に署名する細川総理大臣とエリツィン大統領（1993年）



●日口行動計画に関する共同声明に署名する小泉総理大臣とプーチン大統領（2003年）



●日口首脳会談（2018年11月14日）
出典：首相官邸ホームページ



どうしたら北方領土は返ってくるの？

◆北方領土返還運動のあゆみ

北方領土問題を解決するためには、ロシアとの外交交渉を粘り強く続けることが必要です。こうした交渉を支えるのは、返還を求める国民の一致した世論と強い支持です。

北方領土の返還を求める声は、第二次世界大戦終了後まもなく、北海道の根室にあがりました。当時の安藤石典根室町長^{あんどういしすけ}は、ソ連によって島から追われた人たちの援護に全力をあげるばかりでなく、当時の日本を占領していた連合国軍最高司令官であるマッカーサー元帥あてに、北方領土返還を求める陳情書を出しました。これが、返還要求運動の始まりとされています。

根室であがった返還要求の声は、やがて北海道の各地にこだまし、運動の輪は全国に広がりました。多くの民間団体が返還運動に取り組み、運動の基盤となる都道府県単位の組織が設立されていきました。北方領土返還の実現を目指した運動は、全国各地で大きく展開されるようになっていくのです。



●北方領土復帰要請陳情書第1号



●全国縦断キャラバン隊の要望書を総理大臣へ伝達



●国際シンポジウム2004（富山会場）

◆返還運動のひろがり

北方領土の返還を求める人たちの間から、返還運動を一層推進するため、「北方領土の日」を制定したいという要望が高まり、1981年（昭和56年）、政府は2月7日を「北方領土の日」とすることを決定しました。

1855年（安政元年）の2月7日は、日本とロシアの間で最初に国境の取り決めが行われた「日魯通好条約」が結ばれた歴史的に大きな意義を持つ日です。

毎年、「北方領土の日」には、東京で「北方領土返還要求全国大会」が、内閣総理大臣、衆・参両院議長、各政党代表、民間団体代表などの出席のもとに開催されます。全国各地でも、この日を中心に、大会やパネル展、講演会などの行事が行われます。

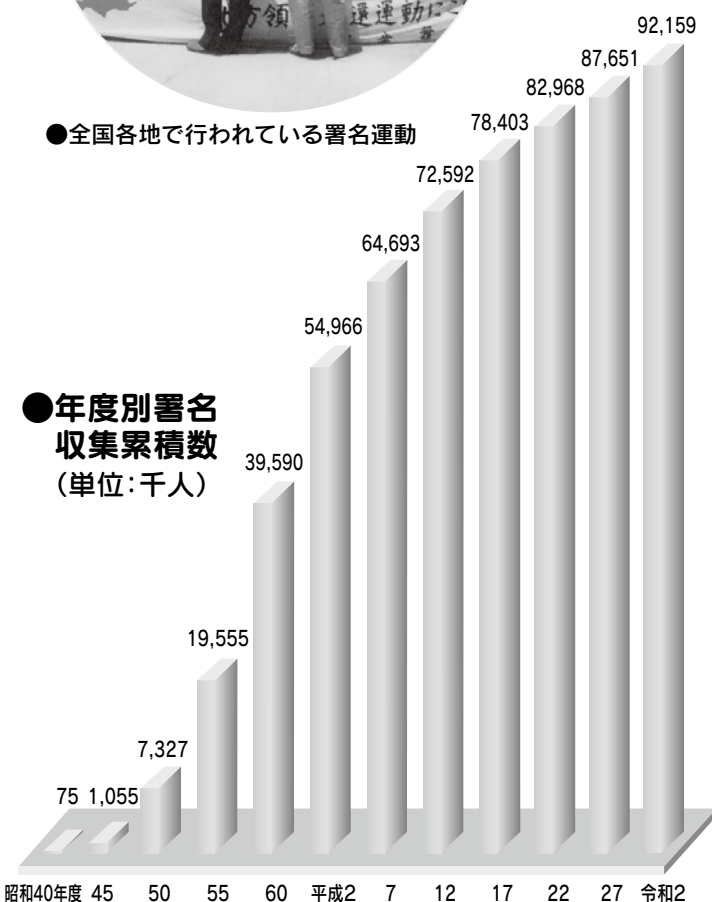
また、国民が北方領土返還を求めている意志を表明する手段として、署名活動が行われています。多くの人たちから寄せられた署名は、令和5年度末現在で9,407万人を超えています。

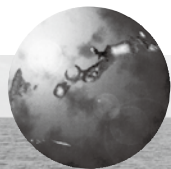


●北方領土返還要求全国大会（挨拶する石破総理大臣）



●全国各地で行われている署名運動





富山県と北方領土とのかかわり

富山県は、北方領土からの引揚者が北海道に次いで多い県です。

越中（富山県）と蝦夷地（北海道）とは、すでに江戸時代には交流がありました。北前船で日本海側を通る西廻り航路により、蝦夷地から大量のコンブが大阪に運ばれていました。その航路は「コンブロード」と呼ばれていました。富山は、「コンブロード」の中継地として発展していたのです。

また、当時の富山県を治めていた加賀藩は、漁師の出稼ぎを奨励していました。代々、神通川以東の33カ村の浦方十村（^{うらかた と むら}漁村の大庄屋）であった田村家の7代目である田村前名が、1818年（文政元年）に遠洋漁業を広めたとの記録も残っています。

1874年（明治7年）には、生地村（現在の黒部市内）の人々が北海道へ出稼ぎに行き、大きな利益を得たため、それ以降、出稼ぎに行く人々が増えていったとのことでした。

明治の終わりごろになると、富山県では、漁業不振と高波や火災による災害のため、漁師の生活は苦しいものになっていました。そのため、新しい漁業の場を求めて、すでに北海道の根室や羅臼で漁業経営者になっていた富山県出身者を頼って、大勢が出稼ぎに行きました。彼らは、「富山からの出稼ぎ者は、真面目によく働く」と言われ歓迎されたそうです。漁師たちは、歯舞群島にも渡り、自然や生活環境が厳しい中、コンブの漁場を開拓していきました。良質なコンブがたくさん採れ、多くの人が豊かな生活を手に入れました。

大正時代になると、富山県から歯舞群島や色丹島に移り住む人も増え、「越中村」と呼ばれる村ができるくらいでした。

このように、根室や歯舞群島の漁場、とりわけコンブの漁場は、富山県の先人によって開拓され、発展したと言っても過言ではありません。北方領土へ渡った人々が支えたコンブは、現在の富山の食文化にも深く関わっています。



◆コンブ漁

齒舞群島や色丹島の住民のほとんどは、コンブ漁に従事していました。

コンブ漁の仕事は、厳しく大変なものでした。朝は5時ごろから始まり、夜は月が高く上るまで家族全員が働くのです。子どもたちも手伝いました。島ではたくさんのコンブが採れ、全国に運ばれました。富山県から島に渡った人々は、持ち前の粘り強さを発揮してコンブ漁を盛んにしていきましました。

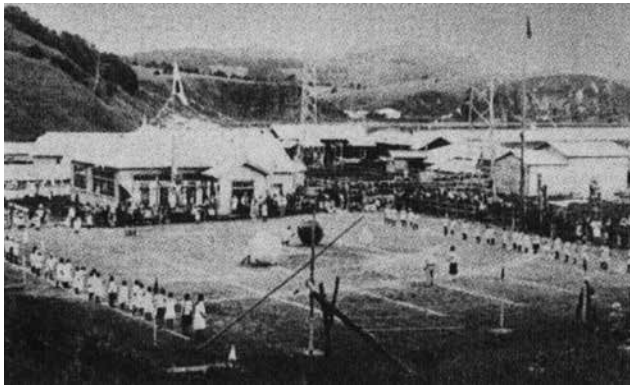
島ではジャガイモなどは採れましたが、米はほとんど育たず、米、みそ、しょう油などの品物は、富山県から送ってもらっていました。

島では、小学校の運動会や学芸会、神社の祭礼などが大変にぎやかに行われ、ほとんどの人が仕事を休んで集まり、楽しい一日を過ごしたそうです。

冬は、海が雪と氷でおおわれてしまい、コンブ漁ができない上に、寒さが厳しいので、富山県に帰って体を休め、春になってから島へ戻る人たちもいました。富山県から島までは、鉄道と船を乗り継いで1週間以上かかりました。



●コンブ干しの風景（国後島）



●小学校での運動会（色丹小学校／色丹島）



●お祭りの光景（国後島）

◆北方領土に渡った富山県民の人数

第二次世界大戦終了後、北方領土を占領したソ連軍は、島の住民を強制的に立ち退かせました。その際に、北方領土から富山県に引き揚げてきた人数は、1,425人だったとみられています。

引き揚げてきた人々が住んでいた島をみると、歯舞群島と色丹島に集中しています。とりわけ、歯舞群島から多くの人々が引き揚げてきました。

富山県人が歯舞群島に集中した理由としては、歯舞群島が北海道本島の根室に比較的近い島であるため、1877年（明治10年）以降から根室に行っていた富山県人によって開拓されていたことが考えられます。

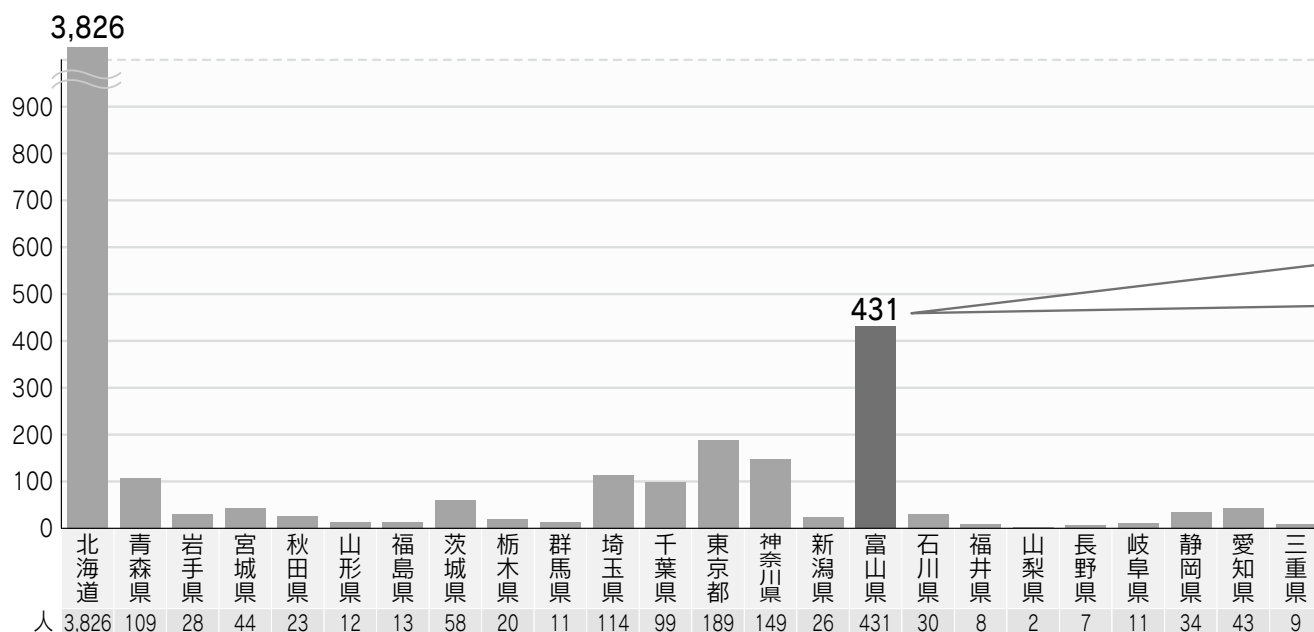
歯舞群島でコンブ採取や漁業を行うためには、コンブの干場の権利を持ち、根室または歯舞の漁業組合の組合員であることが必要でした。富山県からきた出稼ぎ者は、根室や島にいた富山県出身の親方（網元）から、有利な

●北方領土からの島別引揚者数（富山県関係）

志発島	多楽島	水晶島	勇留島	色丹島	計
746	330	221	59	69	1,425

志発島、多楽島、水晶島、勇留島は全て、歯舞群島に含まれます。

●北方領土の元島民数 令和6年（2024年）3月末現在数



条件で干場の権利を借りることができたのです。

島の住民が北方領土から引き揚げた後に居住した場所を市町村別にみると、ほとんどが黒部市と入善町に集中しており、9割以上を占めています。黒部市では生地地区、入善町では芦崎地区に、多くの人が引き揚げてきました。地域的には、黒部川の河口をはさんだ沿岸地域に集中しています。次いで、魚津市の経田地区が多く、その他では、滑川市や射水市にも元島民がいます。

黒部市出身者は、志発島を中心に多楽島や水晶島など歯舞群島の全域に広く分布していました。それに対し、入善町出身者は、志発島へ集中的に渡っていました。

島に渡った時期ですが、歯舞群島では、大正時代の中ごろから1935年（昭和10年）までに多くの世帯が渡島しました。

●富山県内の引揚者分布状況

黒部市	入善町	魚津市	その他	計
835	488	78	24	1,425

富山県への引揚者数（元島民）は1,425人でしたが、すでに900人以上が、ふるさとの島へ帰ることなく、無念のうちに亡くなられ、令和6年3月末現在は431人となっています。

富山県は北海道に次いで北方領土からの引揚者が多いんだね。

滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県	奈良県	和歌山県	鳥取県	島根県	岡山県	広島県	山口県	徳島県	香川県	愛媛県	高知県	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県	沖縄県	海外
5	5	41	26	4	3	2	1	6	12	0	0	4	1	0	2	0	2	2	7	3	2	0	21



富山県における返還運動

◆千島連盟富山支部

富山県では、県内に住む元島民が、1961年（昭和36年）に「千島歯舞諸島居住者連盟富山支部」を結成し、早くから返還要求運動が進められました。千島連盟富山支部では、会員の元島民が県内各地の学校などで、島での思い出や返還への想いについて話す「出前講座」を開催しています。



●千島連盟富山支部 出前講座

◆復帰促進協議会

1969年（昭和44年）から1970年（昭和45年）ごろに、北洋漁場で日本の漁船がソ連にだ捕される事件が相次いだため、1970年に、富山県の漁業団体と沿岸市町村が抗議に立ち上がり、「北方領土復帰促進北洋安全操業富山県実行委員会」を結成しました。1979年（昭和54年）に「富山県北方領土復帰促進協議会」に改称し、ニューヨークの国連本部へ北方領土返還実現を要望するなどの運動を展開しました。

また、他都府県に先がけて、1970年から毎年^(※)、中学生を北海道へ派遣しています。2024年（令和6年）で第55回を数え、これまで中学生400人が納沙布岬から北方領土を望見しました。



●北方領土復帰促進北洋安全操業
富山県大会パレード（1970年 黒部市）



●復帰促進協議会
「少年少女北海道派遣団」結団式

（※）2020年（令和2年）、2021年（令和3年）は新型コロナウイルス感染症の影響により中止

◆富山県民会議

富山県内では民間団体が独自に活発な返還要求運動を行ってきましたが、それらの活動を結集し、行政と一体となった返還要求運動を全県的に展開しようという気運が高まり、1982年（昭和57年）1月、「北方領土返還要求運動富山県民会議」が設立されました。

富山県民会議では、県民世論を盛り上げ、北方領土の早期返還を図るため、会員団体と協力し、「北方領土返還要求富山県大会」や2月7日「北方領土の日」記念事業など、さまざまな活動を行っています。また、2020年（令和2年）9月には、北方領土問題の啓発や返還運動の後継者育成、史料の保存・継承を図るため、「富山県北方領土史料室」を開館しました。

◆教育者会議

児童生徒の北方領土への理解と関心を深めるため、2003年（平成15年）、県内の小中学校の教諭が中心となり「富山県『北方領土問題』教育者会議」が設立されました。

教育者会議では、北方領土教育充実のための教材作成や授業研究などに取り組んでいます。

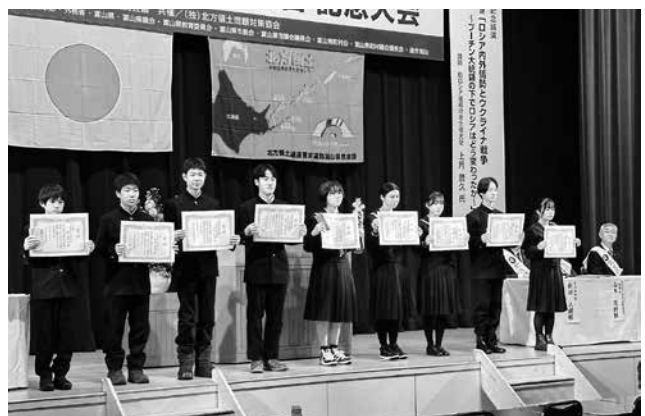
2007年（平成19年）からは、県内の中学生を対象とした『「私たちと北方領土」作文コンクール』を、2017年（平成29年）からは、県内の中学校を巡回する北方領土パネル展を実施しています。



●8月「北方領土返還要求富山県大会」



●富山県北方領土史料室



●「私たちと北方領土」作文コンクール表彰式



北方四島との交流事業

領土問題を解決するためには、日本とロシアの国民がお互いに親近感を持ち、領土問題についての正しい理解を深めることが大切です。

そのため、1992年（平成4年）から、日本人と北方四島在住ロシア人とが相互に渡航して交流を深める事業が行われています。「パスポート（旅券）・ビザ（査証）」なしでの渡航が認められているので、「ビザなし交流」と呼ばれています。

日本からは元島民やその家族、返還運動の関係者や文化・社会等の各分野の専門家などのほか、教育関係者や中学生なども北方四島を訪問しています。

2023年（令和5年）までの32年間で、北方四島を訪問した日本人は14,356人、北方四島から日本を訪れたロシア人は10,132人、計24,488人の相互訪問が実現しています。

◆富山県からの訪問

北方領土と関わりの深い富山県は、積極的に交流に参加しています。富山県から交流事業に参加して北方四島を訪問した人は、2023年（令和5年）までに、延べ190人います。北方四



●日本人墓地参拝（色丹島）



●獅子舞による交流



●万華鏡作り

島には船で渡り、現地の学校や企業の視察、日本人墓地の参拝や住民との意見交換などを行っています。

◆ロシアからの訪問

北方四島在住ロシア人による日本への訪問団は、北海道内や日本各地を訪問しています。2018年（平成30年）には、59人のロシア人訪問団が富山県を訪問しました。

富山県を訪れた訪問団は、ホームビジット（一般家庭の訪問）、県内の観光地や企業、文化施設の見学、県内に住む元島民などとの交流会を行っています。

このような交流を通じて、日本人とロシア人が率直な意見を交わすことにより、相互の理解を深めています。



●ホームビジット（2018年10月 富山県）



●ロシア人訪問団との夕食交流会（2018年10月 富山県）

●富山県からの北方四島訪問事業への参加者

年	計	年	計
1993年	2人	2009年	3人
1994年	1人	2010年	2人
1995年	2人	2011年	6人
1996年	1人	2012年	4人
1997年	3人	2013年	19人
1998年	7人	2014年	3人
1999年	34人	2015年	3人
2000年	3人	2016年	1人
2001年	1人	2017年	3人
2002年	9人	2018年	6人
2003年	8人	2019年	25人
2004年	9人	2020年	—
2005年	4人	2021年	—
2006年	20人	2022年	—
2007年	2人	2023年	—
2008年	9人		
合 計		190人	

●富山県を訪れた北方四島在住ロシア人訪問団の人数

区分	平成7年6月 成年訪問団	平成14年7月 青少年訪問団	平成16年5月 成年訪問団	平成19年10月 成年訪問団	平成21年6月 青少年訪問団	平成30年10月 成年訪問団
男性	18人	17人	26人	18人	10人	24人
女性	52人	13人	49人	26人	40人	35人
計	70人	30人	75人	44人	50人	59人

※2020年以降、新型コロナウイルス感染症の影響や、ロシアによるウクライナ侵略を受けた日ロ関係の悪化により、実施できていません。



元島民の語る島の思い出

吉田 義久さん（歯舞群島（水晶島）出身）

千島歯舞諸島居住者連盟富山支部（黒部市在住）

私の生まれ育ったふるさととは、根室半島ノサップ岬よりわずか7km、すぐ目の前に見える水晶島という島です。

冬は一面雪と氷におおわれますが、春にはピンクのハマナス、スズラン、黒ユリなど美しい花々が島を埋め尽くし、小鳥がさえずる自然豊かな美しいところでした。島には2つの学校があって、1年から3年のクラスと4年から6年のクラス、高等科の3つのクラスに分けて勉強していました。

米などの農作物はほとんど育たず、仕事はコンブなどの漁業が中心でした。当時、コンブは貴重な食材だったようで、今のお金で3,000～4,000万円位の収入があったと聞いています。

島の生活は楽なものではありませんでした。コンブ漁の最盛期には、朝3時頃から船を出し、夜10時頃まで仕事をしていました。子どもでも、学校を休んで手伝いをしないとイケないのです。私は当時8歳でしたが、コンブを干す海岸の草むしりをして、ハマナスのトゲや貝殻で手を切って、血にまみれたこともありました。

冬の間は、海が氷でおおわれ漁ができないので、富山に帰って身体を養生し、春になったら島に行く人もいましたし、ずっと島で生活する人もいました。

開拓当時の生活は厳しかったようですが、時間が経つにつれ島の生活も安定していきました。漁船も新しく造り替え、これから事業が軌道に乗ろうとしていた矢先、終戦後昭和20年9月3日、ソ連軍が突然、北方四島を占領したのです。私たちは島を追われ、小舟で根室まで引き揚げました。祖父母が血と汗で築いた全財産が、そしてふるさとが、一夜にして奪われてしまったのです。

私は、戦後56年経過した平成13年夏、初めてふるさとの島を訪問しました。夢にまで見たふるさとに足をつけた時、私たちは涙でほほを濡らしました。海岸は大きく浸食されていましたが、草原が一面に広がり、草花が咲き乱れるその光景は昔と少しも変わっていませんでした。

私たち元島民は、先人の血と汗で開拓した北方四島の返還を粘り強く訴えています。誰にも故郷があります。私の故郷は北方領土なのです。日本中の皆さんに、北方領土問題を正しく理解してもらい、「法と正義」に基づいて領土問題が解決されるよう心から願っています。私たちの故郷北方領土が返還されるまで私たちの戦後は終わらないのです。

「富山県北方領土史料室」のご紹介



ご利用のご案内

- 入 場 料 無料
- 開館時間 9:00～16:30
- 休 館 日 第2日曜日、12月～3月の祝祭日
8月13日～15日、12月29日～1月3日
- 駐 車 場 無料(約70台)
- アクセス



◆あいの風とやま鉄道 黒部駅より車で約10分



◆北陸新幹線 黒部宇奈月温泉駅より車で約15分

◆北陸自動車道 黒部ICより約15分



問合せ先

団体等による見学で、解説が必要な場合は、事前の申込みが必要です。下記までお問い合わせください。

黒部市役所 企画情報課

〒938-8555 富山県黒部市三日市1301
TEL 0765-54-2115 FAX 0765-54-4461

〒938-0072 富山県黒部市生地中區361
黒部市コミュニティセンター内3F
TEL 0765-57-1011 FAX 0765-54-9147

参考文献および引用文献

- | | |
|--------------------|----------------------|
| ●なるほど！なっとく！北方領土 | 独立行政法人北方領土問題対策協会 |
| ●北方領土返還実現に向けて | 独立行政法人北方領土問題対策協会 |
| ●青少年のための日本の領土・北方領土 | 根室市・独立行政法人北方領土問題対策協会 |
| ●ボクたちの北方領土 | 黒部市教育委員会 |
| ●私たちの北方領土（富山県編） | 独立行政法人北方領土問題対策協会 |
| ●四島交流と四島住民支援 | 外務省・支援委員会事務局 |
| ●われらの北方領土 | 外務省 |

資料や話を提供していただいた団体

内閣官房
独立行政法人 北方領土問題対策協会
公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
千島歯舞諸島居住者連盟 富山支部

第18回「私たちと北方領土」作文コンクール入賞作文集

令和7年3月発行

編集・発行 北方領土返還要求運動富山県民会議
富山県「北方領土問題」教育者会議
(富山県経営管理部行政運営課内)
富山市新総曲輪1-7 ☎076-431-4111(代表)

印刷所 株式会社すがの印刷
